目次

日蓮主義と實際問題（時言）……本多日生
一、民衆運動と節制　二、ストライキと暴動　三、民衆運動と意氣地　四、日蓮主義と暴動不認　五、人道正義の甘言　六、日蓮主義の深刻　七、佛教とその包容力　八、商工業者の不明　九、社會の平和と宗教の復活　一〇、社會の平和と民衆教化　一一、社會の平和と高等政策　一二、日蓮主義の特長
聖德太子の憲法に就て……本多日生
世の中と佛教……野澤悌吾
佛教信仰の正統……本多日生
佛教徒の道念……本多日生
日蓮上人教義綱要……井村日成
私の婦人觀……安西千賀夫
記事、報道十數件

第廿四年十二月號

統一第三百八號　明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正九年十一月一日發行（第一卷一號一日發行）

伊勢國四日市市安樂寺建立淨財勸募之辭

寺は精舍なり、人心を清淨ならしむること、米を精白にするが如く、又寺は功德林なり、この處に詣ずる者は功德を成就すること、園林に入つて華果を採收するが如く、復寺は金剛道場なり、この處に詣づる者は金剛不壞の佛身を成就す、經に云く、佛寺を建立する處は、其地皆金剛より成り、異滅の變あること無しと、今茲に伊勢の國四日市市に於て、法華經の正義を尊重する信男信女等、心を協せて一寺を建立せんとす、幸に靜岡縣下に存する久根の安樂寺を移して、其寺號を襲用せんとす、安樂寺は醍醐法皇の建立にして由緒正しき梵刹なり、建立の計畫已に成つて將に造營に着手せんとす、希くば隨喜の諸氏この擧を贊助し淨財を喜捨し、以て發願を成就せしめられんことを

維時大正九年九月

發願人 本多日生
國友日吉
山路元
兒玉小治良
佐藤
服部柳隆

寄附金勸募要項

一、敷地　金五千圓也
一、本堂兼庫裡七拾坪　金壹萬圓也
一、工事完成　大正拾年貳月
一、寄附金は東京府品川町妙國寺、名古屋市新榮町常德寺、又は四日市市新丁向山路方統一團分團宛申込及納付ありたし、

山路元吉寄附

時言

日蓮主義と實際問題

（二）

本多日生

目次

一、民衆運動と節制……二、ストライキと暴動……三、民衆運動と意氣地……四、日蓮主義と暴動否認……五、人道正義の甘言……六、日蓮主義の深刻……七、佛教とその包容力……八、商工業者の不明……九、社會の平和と宗教の復活……一〇、社會の平和と民衆教化……一一、社會の平和と高等政策……一二、日蓮主義の特長

一、民衆運動と節制

それから次に考ふべき問題は民衆運動であります。今日は政治上のこと經濟上のことに、民衆運動を盛にやるのであります。是れは或る程度までは認めなければならぬことでありますけれども、此の民衆運動に就いては、深く注意せんならぬことがある。それは何であるかといふと、民衆の弱點を明かにして、その弱點を少しでも助けるやうな、誘ふやうな事柄は、絶對に否認しなければならぬのであります。民衆運動は必ずや暴動化する所の性質を帶びるのである。それは心理學から觀

ても、群衆心理は大勢寄ればワイ〳〵言ふことになつて、初めの考よりは違つた方に走るものである、丁度先年日露戰爭の後に日比谷に於て行はれたポーツマスの會議に對する群衆運動が、燒打事件と變化したが、是はどういふものであるか、あの大會を開いたのは河野廣中氏などで、ポーツマスの外交談判が腰が弱いといふことを以て、國家を思ふ精神から起つたものである、然るにその會合の流れてやり出した事は何であるか、電車の燒打、交番の燒打ではないか、ポーツマスの會議に於ての談判の腰が弱いといふ事を、日本の電車の車掌が何を知つて居るか、交番の巡査が何を知つて居るか、ポーツマスの會議と警察なり電車とは、全然關係のないものであるけれども、それを石をぶつけて燒き捲くつた、左樣に原因結果の關係が聯絡を有たないものが群衆心理である。原因結果の關係が聯絡を有たんといふのは、人間違ひをして、藤の頭をどづくか分らぬ、何もどづくべき目標はない「そらやれ〳〵」「どつちか分らぬ」「どつちでもやれ」と言ふのであるから、この振あげた石がどつちに飛ぶか分らぬ。私の生れた國に目賀の祭と言つて盛んな祭禮がある、それは他村同志の衝突でなくして、同じ村落同志でも年齢で分けて鉢卷の色が違つて居る、二十位の若い衆の組は赤い手拭で鉢卷をして居る、その親父の四十位のは、中年寄と言つてそれが黄色い手拭で鉢卷をして居る、それから五十以上六十位のお爺さんの組は、年寄組と稱して白い手拭で鉢卷をして居る、さうしてお神輿が三つあつて、銘々にそれを擔いで、初めから六尺の青竹を持つて出懸けて行く、さうして山の麓の樣な所に行つてぶつかつて喧嘩を初める。もう初めからその覺悟で居る。さうしてそれが山の中腹でやることもあるし、村に這入つてやる事もあるが、村に這入つてやり出すと、女房でもお婆さんでも飛出して屋根に上つて瓦を取つて投げつける、その瓦が自分の親父の頭に當るやら、息子の頭に當るやらそんなことは構はない、又やり居る者自身も、親父も子供も敵と味方になり「おのれこの禿頭」といふので親父をどづく、さういふやうな風習がありますが、群衆といふものは誰の頭にでも石をぶつけるものである。眞に盲目的なる事恐るべきである。それは今も昔も變らぬ、寧ろ今の方が昔よりも甚だしく盲目的行動に出ると云ふ。それであるからこの民衆の力に依つて運動をしやうと思ふものは、暴動化に就て嚴密な注意をすべきである。唯だ酒樽などを拔いて大勢寄せてワイ〳〵やるといふことは、暴動化すべき方法を取つて居るものである。さういふことは誰れがやつてもいかぬ。民衆の力が暴動的に爆發して來ることは、今日一番恐るべきである、眞に日本の恐るべき敵は、亞米利加にもあらず、何處の國にもあらず、國民の中に險惡なる潮流が流つて、米騒動の二の舞をやらうとする氣分がだん〳〵高まつて來る、或はそれを煽てる、是れが國家を傷つくる所の大罪である。如何なることがあつても、眞に國を思ふものは左樣な暴動に參加してはならぬ、多少の理窟はあつても暴動になり初めたならば、終には手が附けられなくなつてしまふ。是れは露西亞に見ても、英吉利に見ても、亞米利加に見ても、今日は何れも困つて居るのである。ア、いふ大きな國、立派な政治家が居る國、色々な手段に慣れて居る國でも、今日英吉利、亞米利加がこの民衆の暴動に對しては殆ど弱つて居る、諸君が冷かにそれを觀覽になつたならば、英吉利などが强大國であつて、世界の他の國に怖い國は一つもなからうけれども、英吉利の恐るべきものは何か、英吉利國民である、英吉利を誤るものありとすれば英吉利國民である、日本も亦今日恐るべきものは同じく國民である、日本を誤るものは日本國民である。そこが大きな問題である、如何なる場合にもこの民衆の勢力を使ふ所の者は、暴動化せしめてはならぬ、であるからストライキを煽てるやうなことは非常に惡いことになる。

二、ストライキと暴動

元來英米などでストライキを合法ぢやナンといふことを言つたから、だん〳〵に是が當じて今日の三角同盟のストライキ或は石炭坑夫のストライキとなつて弱つて居るのである。事は初めに注意しなければならぬ、最初合法ぢやナンと言ふから宜い氣になつてそれが發達してしまつたのである。民衆の運動は必ずや左樣に險惡化する必然の關係を有つものである。丁度人間が放蕩をはじめるやうなものである、一遍や二遍女郎屋に行つても宜いぢやないかと言つて居る中に、一遍が二遍になり、二遍が三遍になる、流連をして戻つて來んやうになる、知らぬ中に家も抵當に置いてしまつて居る、高利貸からも錢を借りて居る、參百圓借りるのに千圓の證文を强つて居るといふやうなことになる。それであるから之を最初に戒めなければならぬ、「少し位は宜からう」と言ふのは、實に考の足らぬことである。斯樣な大事は最初に之を遮斷せんければならぬ。諸君試みに考へて見たまへ、如何なる政治の形式に於ても、この民衆の暴動化することに較べたならば、より善良なる政

治であると言ひ得る、どんな政治でも、民衆が暴動化したやうな壓迫壓制をする政治はない、如何なる不良な政治でも、民衆の暴動化したやうな不良性なるものはない、如何なる慘忍酷薄なる政治と雖も、暴動政治のやうに慘忍なことはない。今露西亞がやつて居ることはどうぢや、どんな壓制政治家であらうが、專制政治家であらうが、亂暴な政治家が出たと言つても、露西亞の今の過激派がやつて居るやうな慘忍なることはないであらう。その證據は英吉利の勞働者は、自由を與へよと言つて團結して、さうして愉敎の人間を干ぼしにすると言つて居るではないか、人の生活を脅迫し、人の權利を脅迫する。今日日本の人でも灰色議員ナンと言つて、灰色といふ名を勝手に附けて居るが、其人は兎に角普通選擧は尙早と考へて居る、灰色ではないけれども餘り尙早と言ふと世間がワイ〳〵言ふから「いやマア俺は考へて居る」といふやうなことを言ふけれども、無論灰色ではない不贊成である、それを灰色議員と言つて追懸け廻つてワイ〳〵言つたり、「贊成せんければ承知せん」と言つて玄關で捉へたり、人の意思の自由を脅迫して居るではないか、彼等は人に向つて自己の自由を要求する、己は自由を叫んで他人の行爲を束縛せんとする態度に出るものではないか、矛盾も矛盾明白なる矛盾ではないか、もつと麗らかに世の中は造らなければならぬ。尙早だと云ふならば已むを得んぢやないか、大いに天下に其說を主張して、普通選擧なら普通選擧が多數で政治的に通るやうにするが宜しい、灰色議員を追懸け廻るといふやうな、さういふ方法を以て事を成さんとすることは甚だ卑むべきことである。所が總て新聞の記事などは、その方が面白いやうに書いてあるけれども、少しも面白いことではない、即ち民衆を驅つて暴動化せしめんするものである。

三、民衆運動と意氣地

民衆の暴動化に就ては、嘗分警告を與へて居る人もあるので、或る哲人が書いて居る所を見ますと、實に恐るべきものである、一般の民衆が寄つて騷ぐ時分には、どういふ樣な風になつて行くかと云へば、彼等は唯だ各自の權利を求めるといふ聲に醉ふて、遂に國家の統率力を弱め、その甚だしきに至りては主權の動搖する事も意としない、即ち露西亞の如く獨逸の如く、國體をも變更する騷ぎを勞働者の中から仕出すのである。さうして多くの群衆は唯だ意氣地といふ事に聞くなつて、おれらがやり出した事を妨害するかといふ樣な風で、事の大小輕重等を考へる餘地はない、「ナニ贊ツ、おれらの前に立ちやがつて」といふ風に意地に固つてしまつて、殆んど子供の考の樣な淺薄な、理窟のない事に囚はれて、何でもない事を大きな問題の樣に言ふのである。例へば巡査が來て、此所を通つてはならぬと言ふと、吾々の自由を妨害するとか、警察の干渉だとか言ふ、何でもないけれどもそれを非常に大きな問題の樣に言つて、不平を鳴らすのが群衆の態度である。その爲めにその爭ひが黨爭といふか、私心に囚はれて正義とか公平とか云ふ事は分らなくなる。自分に味方して異れるならば、邪まなものでもそれが善いと思ふ、自分の行爲に反對するとか、それに警告を與へるものは、如何なるものでも之を敵とする、そこには正邪の觀念はない、一時の意地張に依つて敵味方に分れてワイ〳〵やるのである、さうして遂に社會の秩序を攪亂し遂には無政府の狀態に迄進み行くのである。殊に彼等は國家の利害文明の進歩といふ樣な事に就ては、之を判斷する所の能力を有しない、それ故に多くの勞働運動に於ては、國事を議する場合には之を過つので――例へば軍備を如何にすべきかといふ樣な問題に就ても「そんなものはどうでも宜い」といふ事を言ひ出す。群集は何れの國でもさうである、露西亞が兵隊を解散してしまへと言つて、直にそれを行つて居る。必ず群集は國家を經營する所の愛國的の觀念を發露することが出來ない、個人々々としては愛國者であつても、集つた時には愛國の行爲ではなくして、唯だ輕はずみのことをやるものである。それが必ずや國家の經綸を誤る、國防といふやうな事は忘れてしまつて、さうして唯だ聲威を振ひ、譯の分らぬ者になつて行くのである。それが爲に人類の幸福を阻碍し、國家の進運を過つ事に終るのである、決して民衆運動は善良なる結果を得ない。曾て佛蘭西が革命をやつた、その革命の中に酖酒したるものが、今日の過激思想である、餘り極端に自由を叫んだ、その惡る所が遂に今日の破壞にまで進んで來たのであります。故に民衆運動には、暴動化を注意する點に於て、餘程嚴密であらねばならぬと思ふ。

四、日蓮主義と暴動否認

玆に又日蓮主義が大事だと思ふ、日蓮聖人は熱烈に正義の鬪ひをやるけれども、決して多數を恃むことをしない。多數の

暴力に依つて事を遂げんとするは大反對である。日蓮聖人は當時天下の三類の敵人と言つて、一般民衆の反對、或はガラタ坊主の反對、或は活如來の樣な僞善者の反對、總てを引受けて毅然として正義の主張を敢行したのである。大勢弟子も居つたけれども、單身正義に由つて奮鬪したものである。是れが眞の文明の鬪ひである。多數の暴力を恃んで百姓一揆に等しい事をやつて、さうして理が非でも自分達の言ふ事を聽かなければ火を附けるといふ樣なのは、これ野蠻の行爲にあらずして何ぞ。世界で流行つて居るからと言つて、それが文明だと言はれて、「アヽさうか」と言ふのは、その人が不明だからである、何處で流行つても左樣な蠻風を振ふ樣なものは、非文明の甚だしいものである。一人が唱へても正義のある所、言論に依つて人々の精神を承服させるのが文明である、日蓮がやつた如くに、天下は悉く敵であつても、一人起つて鎌倉の街頭に出て鬪つて居る、流されやうが首斬られやうが、決して反抗しない、「今日は首斬られるから、此奴等を追拂つて呉れ」と言ふ事であつたならば、あの時分に信徒も相當あり、武士もあるから、三百人の强者位は屢越に於て待伏せして戰ふ事が出來るのみならず、そこで日蓮聖人を除して、山を越えて逃げる事も出來たであらうけれども、左樣な事は少しもしない、四條金吾を呼んでも誠に素直な有樣を以て、靜かに頭の座にお坐りになつて、「是れ程の喜びを笑へかし」と言つて、正義の勝利を信じて居つたのである。この態度は世界の文明人に敎ふべきである、今の自覺だとか、政治の民衆運動といふ樣なことは野蠻なものである、大勢寄せて、ワイ〳〵言つて何が宜いか。寧ろ人類には哲人の出現を要するのである、釋迦如來の如き大哲人、聖德太子或は日蓮聖人の如き大哲人が出で、さうしてこの人心を指導する事が宜しいのである。唯だワイワイ自分の我慾しか知らぬ者を、頭數ばかり寄せて、さうして唯だ酒樽を拔いて鉢卷して跳るといふ樣なことをして、その數が二千人より三千人といふのを以て脅かすは、人類の禍である、何處までも正義を以て人心を敎化して行かなければならぬ、故に日蓮聖人が單身正義を揮いて起つて暴力に屈せざりし所に、日蓮主義が現代に敎ゆる所があると思ふ。

五、人道正義の甘言

それから次には人類同胞とか人道正義とかいふ樣な、あまい言葉に對して、國民の騙され方が今日は大問題である。社會運動でも大勢の者の爲にするとか、人道正義の爲だとか、國家は戰等をするから、詰らんとか言ふ、それが宗敎家の口からも出、西洋を視察して來た人の口からも出、又日本に於ける民衆運動の人の口からも出る。例へば今日はデモクラシーと軍國主義の鬪ひぢやと言ふ、軍國主義といふのはどういふ意味か、何か一つの弊害を捉へて言ふのだらうけれども、國を擧げて戰をする事がいかん、國々といふ樣な事は古い、兎に角デモクラシイちや、デモクラシイとは個人の自由を尊重するのだといふ事になつて來るから、軍國主義とデモクラシイの鬪ひなりといふ樣な標榜は、非常に宜いやうで、而もそこに大いに警戒すべき事があるのである。人類の爲めにするといふ事は單に宜い事だと思ふ、そこに騙し文句があるのである、どうせ人を騙すといふには、初めから「貴樣殺すぞ」と言へば騙されはせん、あまい言葉で言ふのであるから、そのあまい言葉を看破するのが、今日は大切なのである。あれは言分が宜いからと言つて、それに附いて行く樣なあまい國民であつてはならぬ。それはどういふことであるかと言ふと、この人類の爲とか社會民衆の爲とか言ふてやつて居ても、今日の文明は國家の組織體を外にしては、人類の幸福は保障されないのである。人類同胞と言つても皆な國家を組立つて居る、そこで或る國なら國が人類同胞と言ひながら、決して自分の國の利益を捨ててはいない、或る宗敎が人類同胞と言ひながら、その中にやはり或るものがある、それは餘程注意しなければならぬ。　明治天皇の御製に、

四方の海みなはらからといふなるに
なぞ波風の　立ちさわぐらむ

と仰せられた、西洋では四海兄弟といふやうなことを盛に言ふて居りながら、西洋の歷史を見、事實を見るといふと、互に掠奪反噬を事として居る、彼の言葉は汚れて居る、口では同胞と言ふけれども、而も確分侵略の事實が多いのであつて、是れはどういふものであるか、西洋の歷史に就ては大いに研究すべきことである。我國民に對し、佛蘭西のボール、リシャールといふ博士が忠告して言ふのに、「如何に西洋人が親切な優しい事を言つても、その顏を見よ、彼等の口の端には血が附いて居る、彼等の手に持つて居るものを見い、血に塗れた劍ではないか」といふやうなことを博士が書いて居る、私は西洋人に果して左樣な觀念があるかないか知らぬが、彼は佛蘭西人にして西洋の內情に精通して居るのである、西洋から來た人

道主義、同胞主義といふやうなものは血と汚れとに塗れて居るものにして、神聖ならざるものであると思ふ、昔ては四海同胞と言ひながら、國家的爭奪戰爭を盛にした、今は勞働問題でも人道の爲めとか社會の爲だとか言ひつゝ、その中に激しき鬪ひをやつて居る。是れが社會の爲ぢやと言ひながら、人道の爲ならば、人の心を和げて、ストライキなどをして殿合ふといふやうなことを否定しなければならぬ、社會の爲めと言ひながら、拳固を振上げて居る。左樣にしてどうして世の中の平和が得られるか、事實に於ても得られて居らぬ、彼等の國々の不安はどうであるか、どの國が今日模範であるか、亞米利加の狀態、英吉利の狀態、佛蘭西の狀態、一つも我國の模範とすべきものはないではないか。未だ〳〵比較して御覽なさい、日本の方が物價も安いし、人心も落ついて居る、向ふの國の狀態は、日本より一層甚だしい事が現れて居る。考へて見れば日本は寧ろ幸福である。羨むべき所は一つもない、獨逸は戰に敗けたし、殆んど餓鬼みたやうになつて居る、又佛蘭西なども今日の狀態は、戰後の恢復は容易ならぬと言はれて居る、何處の國も非常な有樣で何も羨むことはない、日本は日本として歩むべき道があらうと考へる。そこには左樣な血に汚れたあまい言葉に乘らなくとも、我國は神代よりして誠に尊い事が示されて居つて、我國の目的は「天業を恢弘し天下を光宅する」にある、天業を恢弘するといふのは天の仕事をお手傳ひする爲に日本の國は出來て居るのである、天の仕事といふのは天は萬物を生々化育すると言つて、この天の惠に依つて一切皆な生きて居る、日月之を照し、雨露之を潤して、米が出來、麥が出來て居るのである、天業を恢弘しといふ事は、天が萬物を生々化育する樣に日本はこの國の力を以て世界の人類の間に天の仕事を爲すのである、さうして彼等暗きに彷徨へる者に光を與へ、歸るに家無き者に家を與へるといふので日本と稱して居る、現に日の本と稱し日の丸の旗を立てゝ居るではないか。決して一身一家の私慾の爲に出來て居る國家ではない、朝日が輝いて遂に世界の暗黑を照すが如くに、日本の國家は世界の爲に造られた國家である、神聖なる人道の爲に、正義の爲に、世界の爲に起つたものであるから、何も西洋から來た血に汚れて居る四海同胞主義とか人道主義とか萬國主義といふやうな變な危なげな、生途川の婆さんの樣な所から來なくても宜い、一點汚れなく、昔て一度も日本の歴史に於ては汚點を印して居らぬ、眞白な毛氈の如く白紙の如く、一點汚れなきものは日本の歴史である、その根本に天業恢弘、天下光宅の神勅を奉じて居るから、西洋から來た汚れた人道主義とか、耶蘇の坊さんの言ふやうな甘い言葉などは聞かなくとも宜いのである、同じ事でも汚れのある言葉を受繼いではいかぬ、それは似て非なるものである。であるから日本人は何も西洋に涎を流す必要はない、日本に根本からある所の、立派な我が國家の理想、目的を奉じて所謂億兆心を一にして、皇運を扶翼するといふことで事が足りて居るのである、何も事新しく面倒な理窟を言ふことはない、日本人は左樣な事はちやんと分つて居るのである、一旦緩急あれば義勇公に奉じ、以て天壤無窮の皇運を扶翼するといふ中に一切の美しき、人類を救ふ道德が包藏されて居るのである。

六、日蓮主義の深刻

そこで人類同胞ナンといふやうなあまい言葉に騙されていかんといふ事を、最も能く戒めたものは日蓮主義である。佛教の中にも慈悲とか親切といふ事がある、例へば彌陀の悲悲といふことの爲に、唯だナンマイダー〳〵と言つて、生きて居る内から死んだ樣になつて、夫で死んで行く者であるから、國が滅んでも構はぬといふ事になる。現に承久の亂の當時淨土宗の開山であつた法然はどういふ事をして居つたか、後鳥羽天皇が隱岐の國に流され、京都の勢力が全滅された時に、彼は黑谷の眞如堂に閉籠つて、朝から晩まで六萬遍も念佛を唱へるとか言つて、カン〳〵鐘ばかり叩いて居つて、さうして朝廷の勢力が左樣な有樣になる事を知らなかつた、程經て出て來て「ハア、そんなことがありましたかい、ナンマイダー〳〵」といふやうな譯であつた、左樣な事はいかんといふので、日蓮聖人の『立正安國論』を見ても、後鳥羽院の御宇に法然といふ者ありと云つて、日蓮聖人が憤慨して書いて居らるゝ、宗教のあまい言葉に囚はれて、國家の立場を忘れてはいかんといふ叫びを擧げた先覺者は日蓮である。基督教にも宜い所はあるけれども、基督教を通して若も神聖なる大和魂が廢れ、救世軍を通して眞の日本的精神の一角でも崩されるとするならば、斷然左樣なものに携つてはならぬと、斯く教ふるものは日蓮主義である。吾々は決して彼等を宗教として罵りもしない、又左程に怖れもしない、決して宗派的觀念として言ふのではない。而し往々にして基督教を信ずるが爲に、愛國の觀念と憤切るちやないか、或る海軍の有數なる將校が、教育會議に出て「自分は伊勢の大廟を尊敬することは要らぬと思ふ」と云ふやうな事を言つて、免職になつたとか、或は或る學校の教師が陛下の

お寫眞を拜するを拒んだとか、だん〳〵數へ擧げれば彼等はくだらない事を言ふ、如何にも淺薄である。そんな馬鹿なことをしないでも宜いが、馬鹿な人間が居るからさういふことになる、吾々攻擊する者が卑しいか、攻擊される樣な材料を撒く者が卑しいかといふことを考へなければならぬ。何も吾々は基督教であるからといふ樣な意味ではない。

七、佛教とその包容力

世界の宗教を和合する時に、先んじて包攝融合の能力を有つて居るのは佛教である、頑迷固陋なるものは基督教である。法華經は廣いものであるから、嘗て印度に起つた時には印度の婆羅門の教を容れて、今祀つて居る帝釋とか梵天とかいふものは婆羅門の神である。支那に來ては支那の儒教と融合して、決して佛教から儒教を攻擊して不都合だと言つた者はない、日本に來ては神ながらの教と融合して、高僧碩徳が決して敬神の觀念を破つた者はない。故に西洋の宗教に對しても、佛教は決して固陋な事を言ふては居らんが、日本に來て彼等が國家觀念を横切る樣な事をやるならば、之を捨て置く譯には行かぬ。彼等の演說の中に澤山左樣な證據がある、隨分現在は思切つて變なことを言つて居る、そこを大いに警戒しなければならぬ、人類同胞主義のあまい言葉に醉ふてはならないのである。その他或はトルストイの文藝がどうであるとか、色々文藝上の問題から、國家の境はいらぬとか、或は學問は獨立であるといふ事を極端に主張して、學問は神聖ぢや、國家などは狹い、眞理は世界的ぢや、太陽は日本ばかりを照らして居らぬとか、一と二と合せたら三ぢやといふ眞理は世界的ぢや、日本で攻擊した所がそんなことが何ぢやといふやうな詰らぬことを學者が言つて居る。さういふものは駄目である、如何なる大きい考があつても今の文明に貢獻するには、國家を通してゞなければ駄目ぢや、故に日蓮聖人は我れ日本の柱とならむ、我れ日本の大船とならむ、我れ日本の眼目とならむ」と言はれた、この觀念を以て人類同胞の甘言に欺かれん樣にせなければならぬ。斯る意味に於ても日蓮主義は最も宜しいのである、唯だ狹い國家觀念から出て人道主義を攻擊するのではない、非常な美しい佛樣の慈悲なりさういふやうな廣大な思想を有つて居つて、而もそこに注意を與へて、この罹の池んだ人道主義の觀念を攻擊するのである。その區別が附かん人が澤山日本にもある、故に大いに日蓮主義を宣傳して、それらの不透明な頭を教へるのが、眞に日本の國を擁護する事になるのであります。能く注意して御覽なさい、餘程えらさうに見える宗教家學者の中に、隨分頭の出來損ねて居る者がある、是等は皆な日蓮主義に依つて教化しなければならぬ人達である。

八、商工業者の不明

尙ほ玆に申上たいことは、一般の商工業者の態度であります。これは非常に大きな問題だらうと思ふ、一方は勞働問題でありますけれども、勞働問題が勃發して來る相手は即ち商工業者である、是れが今や何と考へつゝあるのであるか、何を爲しつゝあるのであるか、眞に彼等は自覺して居るか、この點に於て疑ひ無き能はずであります。大體日本の商工業者は慢心して居りはしないか、彼等は誰れを師匠として教を聽き、誰れを先生として道を聽いて居るか、唯だ算盤を彈いて錢を儲けることを知つて、儲けた錢を以て物質的享樂に耽る事ばかりならば、それが抑〻世の中を害する所の原動力でありはせぬか。この危機に逼りつゝある所の冷酷なる社會、絶望的なる社會、露西亞のやうな悲慘なる社會が、或る意味に於ては刻々に逼りつゝありと見て宜いのである、少し油斷すれば如何なる國家も露國と同一の運命に陷るのであるが、又陷らしむべく大なる力を以て臨んで居る者があるのである、特に日本などに對して左樣な運動を起すべく準備されて居るのである。是れは中々容易な問題ではない、此場合に斯樣な慘忍酷薄なる社會が表はれて來ることは、何に依つて防がれるのであるか、商工業者はどういふ考を有つて、この社會の壞れ行くことを防止し得ると考へて居るのであるか、私はこの點に於て一般の商工業者に大なる反省を促さんとするものである。彼等は唯だ腹たる金錢に依つて、物質的享樂に耽けらうとすることが一般の有樣のやうに思はれる、さうして一切の事柄が金に依つて解決せられるやうに思つて居りはせぬか、隨つて彼は精神界に働く人などに對して、尊敬を拂うことさへも知らぬ、全體ではあるが、先づ十中の九までは、金を持つて居りさへすれば困ることはないといふやうな風でありはせぬか。この壞れ行く社會、冷酷なる社會は、金を持つて居るものが一番に災厄に逢ふといふことを承知せんければならぬ、それに備ふるにはどうしたら宜いか、金を持つて逃げ歩いたら宜いか。現に先年の米騒動の時に、神戸の大商店の女主人が逃げ歩いて、後藤男爵の屋敷に逃げ込んだ、そこに居つても危ないと言ふので又逃げ

て何處か隱れ廻つて居つたといふことが新聞にあつた。又外國邊りに於ては、金持の主人の逃げ廻つて居るのを捕へて殺したといふことも澤山あつた、この間あたりも、六十人計りも富豪が慘殺されたといふことがあつた、日本でも今度騷げば、どて、つ腹を扶られるものと覺悟せんければならぬ。其厄難は何に依つて免れることが出來るかといふことを、もつと痛切に研究しなければならぬ。是れはどうしても一般の人心を指導する根本に還らんければなるまい、世の中は金計りのものでないといふことを、自身が本當に知らなければ駄目である。自分の頭が金さへあれば萬能ぢやと思つて居るから、勞働者の方も金に向つて熱中して來る、總てお拜金的態度になるから、金に向つて掠奪がはじまつて來るのである。

九　社會の平和と宗教の復活

この社會を構成する原動力の中に宗教が一番大事なのである。過激派の方から言へば、社會を壞す最初に宗教を破壞するのである。個人にして考へても、先づ泥棒にでもならうといふ前には、珠數を切つて捨てるのである。勤行をして拜んでそれから泥棒に出懸けるといふ者はなからう、今まで勤行をして居つたけれども、是れから泥棒に商賣換へをしやうといふ時には、必ず先づ珠數を捨てゝ掛る、世の中が破壞せられる前には、先づ宗教を捨てるやうになる。過激派の破壞運動の根本にはマルクスの唯物史觀を置いてある、宗教の信仰を先づ捨てさしてしまふ、嘗て大逆事件を起した日本の幸德秋水が、どういふ態度を執つて居つたか、彼があの大逆事件の前に、中江兆民の名に依つて『續一年有半』といふ本を書いた、それは何を書いたかと言ふと、無神無靈魂論である、神も無ければ魂も無い、菅原道實公を日本では天神樣と言つて祀つて居るが、そんなものは何にもならぬけれども、北野の天滿宮に行く道に馬の糞が落ちて居る、是れは中々惜いものだ、之を畑にやれば菜葉も出來る、大根も出來る、向ふのお宮に祀つてある天滿宮と、この馬の糞とどつちが惜いかと言へば、馬の糞の方が惜いといふことを知らなければならぬといふやうなことを書いた。その時分には國民が爭ふて之を買つて讀んだ、中江兆民の『續一年有半』と言へば、洛陽の紙價を高からしめたと言ふ位で、皆な面白い本だ、成る程馬の糞だといふので、日本人は餘程それに贊成して居た、今でも未だその贊成を取消さずに、その僅來て居る者が多い位だ。それから幸德秋水が牢の中に這入つて居る時に書いたものが『基督抹殺論』である、基督などは犬を叩き殺すやうに撲殺してしまへと言つて居る、さうして彼がやつて居ることは大逆事件である。彼は懼れ多くも我が皇室に對する大逆罪を企てた、今一つは東京市を眞暗がりにしてしまふといふ、都市破壞の運動がそれに結び附いて居る。さういふ罪惡の一面に『基督抹殺論』を書き居るのであるから、そこに注意しなければならぬ、この間帝劇で行はれた『信仰』といふ芝居の中にもそのことがある、あれは佛蘭西人が書いた脚本ださうだが、王樣が宗教ナゾといふものは要らんものである、捨てゝしまつても宜いと言つて居る時に、宗教の長老が來て「王樣耳をお貸しなさい」と言つて、「あなたはさう宗教を馬鹿になさるが、この宗教の信仰を民心から取つた時あなたの頭に載いて居る王樣の冠は叩き落されます。それのみならずあなたは命が無くなります、私は坊主を止めても商賣でも始めさへすれば命は取られないけれども、王樣は命が無くなります」といふことを耳打ちする。そこで王樣がびつくりして、是れは大變だ。それではやつぱり仲よくしやうと言つて握手をするといふ芝居をやつて居つたが、是れは事實にそのことを敎へて居る、是れはもう考ある者の誰れしも知つて居ることである、だからして金持が先づ自分のどて、つ腹を扶られんやうにといふには、國民に宗教的を盛ならしめるといふ運動に、最も力を盡さんければならぬのである。

一〇、社會の平和と民衆教化

もう一つは一般の民衆教化運動でありまして、即ち道德上の感化であります。人は決して金のみに依つて生きて居るものではない、やはり德は本なり財は末なりで、自分の人格を修養して、道德的人格に戻らなければならぬ、唯だ金ばかりで生きて居つてはならん、自分がやはり德は本なりといふことを考へて、社會に向つて左樣な德化を及ぼすことに十分骨を折らなければならぬ。

一一、社會の平和と高等政策

もう一つは高等なる政策である、高等なる政策といふものは唯錢儲けの事計りではない、國家が所謂民力滿養であるとか、或は精神教化であるとか、その他人心を融合せしむべき社會事業といふものゝ爲めに、國民も政治家も心配し、金持も先きになつてやらなければならぬ。「又寄附を言ふて來た、煩さい」と言つて顰面をしないで、自ら進んで國家の高等政策を援助

して、之を普及せしむることに努力しなければならぬ、果して日本の商工業者が宗教の信仰復活運動に左樣な熱心があり、世の道德的倫理的運動に參加し、國家の高等政策に力を盡して居るや否や、是は實に疑ひなき能はずであります。私は富豪の言つて居ることに就いて憤慨に堪へんことがある、吾々がさういふことを言ふと、「私はそんなことは知つて居る」と言ふ、「知つて居る」といふやうなことを口で言ふのは誰でも言へる、どんな人でもそんなことは知つて居ると言ふけれども、事實自分の意見がどつちを向いて居るかといふと、今日本の商工業者の中に於て、唯今申したやうな立派な考に依つて活動して居る人は極めて少ない、やはり金力萬能の觀念に居る人が多いのである。

一二、日蓮主義の特長

玆に亦日蓮主義の必要があるのである、或る者は何も日蓮主義に依らなくとも、工場の事は工場法に依るとか、或は經濟關係から解決が出來ると思つて居る、勞働者も同じ考を有つて居るし、資本家もさう考へて居るが、如何に勞働組合法が出來やうとも、如何なる經濟的解決方法が出來やうとも、それに依つてのみでは、人心は決して安定を得られるものではない、一面に盛んに宗教心を復活せしめ、倫理の觀念を普及せしめ、國家の高等なる政策を實行することに商工業者が努力しなければならぬのである。そこが日蓮主義で行けば能く分るのである、日蓮聖人は先程申したやうに、人民の暴動化には非常に反對をするが、併し一面には今申したやうな宗教の信仰がなくては世の中がうまく行かん、國家の高等なる政策を重んじなければならぬといふことを、強い意味に於て宣傳して居る者である、日蓮主義は法華經に依るのであり、日蓮聖人が宗教家であつたといふことに依つて、日蓮主義は單なる倫理でもなければ經濟論でもない、所謂非常な根據の深い宗教である、それ故に今の商工業者の辯りを覺す上に於て日蓮主義の宣傳が大切なのであります。

以上數へたやうな健全なる國民の自覺、即ち哲學倫理宗教の承認を經、國家觀社會觀文明觀を正明にし、國體を擁護し、國威に僥へ、一心協力を念とし、民衆の暴動化を嚴重に防止し、愚なる意氣地を捨て、人類同胞の甘言に欺かるゝこと無く、天業恢弘の皇謨を奉じ、特に商工業者の不明を覺醒して、宗教の復活、民衆教化高等政策の普及に寄與するの美風を喚起し以て社會の平和と國運の隆昌とを期し、行いて理想的文明の建設に貢献すべきである。之が爲には日蓮主義は率先して最善の努力を致すものであり、こゝに日蓮主義の特色は存する次第であります。（完）

聖德太子の憲法に就て（二）

本多日生

先づこの「憲法本紀」に書いてある事は、いろ〳〵結構な事がありますが、これはこの憲法を發布されるに就ての注意としてお示しになつて居るのであつて、その中に特に大切なる點は、

政を正しくするの本は學問に在り、學問の本はこれ儒、釋、神なり。（憲法本紀原書漢文）

と說かれて居る、政を正しくする根本は學問から行かなければならぬ、唯だワイ〳〵やつて族を立てたり提燈行列をしたからと言つて、それで政が善くなる譯のものではない、巡査と喧嘩してそれで政が善くなるものではない、そんな事は下らぬ事ぢやないか、どつちが勝つたつて負けたつて……政を正しくする本は學問から行かなければならぬが、その學問といふのも今の政治學では駄目ナンである、そこで學問とは儒教と釋教と神道、この大事な精神的の學問から出發して、始めて政は正しくなる、今日はその大事な點を忘れたのである。西洋でも之を忘れたが爲めに、西洋の政治といふものは混雜に陷つて困惑して居るのである、餘りに法治主義と言つて、法律規則を以て世の中を治めやうとし、人格に依らず、道德に依らず、權利義務の關係を規定したる活判の文字のみに依つて天下を治めんとしたが爲めに、それが失敗

に歸して來たのである、今の政治學は眞の政治學にあらずして、政治の枝葉を學んで居るものであつて、政治の根本として學ぶべきはこの儒教、釋教、神道の三つである。

是れ此の三法は天極の自有にして、人造の私則に非ず。皇政を導き、國家を治め、人情を正しうし、衆民を善くするの實物也。

この三つは天然自然の法則から出來上つたもので、人間が勝手に拵へたものではない、それ〳〵の聖人哲人に依つて祖述されたものであるけれども、基く所は天地の大法である、それ故にこの三つの教から行けば、我國の政を導き、國を治め、人情を正しくし、一般の國民を善くして人格を作り上げることになるのである。人格が壞はれてしまひ、人情が惡くなり、國が亂れ、政が曲つた時には何にもならぬちやないか、それを直して行くのはこの儒、釋、神の學問である。

然りと雖も其の一に通ずる者は知らざるを以ての故に、其の他を非して、有に非らざる者はそれ妄物なりと謂つて互に誹謗し、交々嫉妬す、學遺つて邪と爲り、法遺つて妄と爲る。是れ聖を破り政を破るの大罪也。學ぶこと無くして遊惰せんには如かず。

所がその一に通ずる者は知らざるを以ての故にその他を非するといふ事がある、儒教をやつた者は佛教を知らず、神道を知らないから惡口をいふ、神道に囚はれた者もその通り、佛教に囚はれた者もその通り、それは前に申した德川時代に起つた弊害がそれである、左樣に自分が儒教一つを學んだからといつて、佛教と神道の惡口を言ふといふやうな者は、學問では無いと言はれて居る、聖人を破り教法を破る所の大罪を犯して居る者である。前に言うた復古神道學者のやうに、神道だけをいうて儒教佛教を罵る者は、學者にあらずして大罪人である。佛教をやつても殺若心經ぐらゐをやつて、國體の事も考へなければ、聖人の教も考へぬ、道德も要らぬ、國も要らぬと云ふやうな事を言つて居る者は、これ亦大罪人である。左樣な事をする位ならば寧ろ學問などをしないで、遊惰せんには如かず、遊んで居つた方が宜い、そんな事をする位ならば學問などはやめて田樂でも食ふか、非でも打つてブラブラして居つた方が宜い。儒教を學んだが爲めに佛教の惡口を言つたり、佛教をやつたが爲めに、天下國家を輕んじ夢か幻ちやと云ふならば、そんな人間は田樂でも食つて遊んで居つた方が宜いと嚴誡されて居る。

學を爲して邪を發し、理を破つて暗者と成り、心を破つて亂者と成り、聖を破つて邪者と成り、政を破つて叛者と成る。

そんな者は學問をすると云つて邪惡を行ひ、暗愚の者と成り亂を成す者である、邪まな者である、謀反人であると、斯く迄に三教鼎立を忘れてその一端に囚はれたる者を痛擊されて居る、これが當時憲法發布の時の宣言であつたのである。それ故にこの儒、佛、神の三教の中にある事が互に相責け合つて行き、物を正面から教へて行くものもあれば、横から教へて行くものもある、迂回して教へて行くものもある。それは唯だ『大學』一卷を以て「子曰く、大學の道は明德を明かにするにあり」といふやうな事だけで中々人が救はれるものではない、さういふ方に行く者もあり、又やはり「こゝに一人のお婆さんがあつて、それが慈悲りの婆さんで、始終に嫁を虐めて」といふやうな事から段々教へて行かなければならぬ者もあるし、中々世の中といふものは一筋で行くものでないと聖德太子は達觀されて居る。學者は實際に疎き者なるが故に、博學なりと雖も、實際の人生は更に複雜なるものであるから、彼等に委せて置く事は出來ぬ、左樣な者は政に大なる利益が無い、儒教、神道、佛教といふやうな大きな教は、要らないやうに思ふ者があつても、是れからして信仰を教へ人格を鍛へ、段々やつて行く事に依つて、それが政に大なる利益を與へるものである、即ち「政の大益也。」と言つてある。今は小さな學說を散んで、大きな教を捨つるが故に、政の大益といふものが無くなつたのである、政を大いに益する所のものが佛教である。この教を以て人心を教化して居る事が、政治の根本的大利益であるといふ事を知らなければならぬ。それが日傳取人足みたやうな頭腦ばかりになつてしまふから、兎に角普通選擧でも唱へなければ、政治ではないと思ひ、浮き本堂の中に正々堂々と人格の向上を論ずる者などは、政治に無關係な者だと思ふやうな薄ッペラな人が今日は充ちて居るのである。旗を擔いでコリヤ〳〵といふやうな者ならば、出ても出なくても同じものぢや。政治を論ずるにさういふやうな暴力を賴んで警察官と衝突して、それを突破したとかせぬとか言つてワイ〳〵やつて居る、實に低級なる頭腦である、世界を通じてそんな事を政治と思うて居るから破壞に終るのである、一人の主張することと雖もその論旨のある所を傾聽して、贊成すべきものは贊成し、反對すべきものは反對する爲めに、議會政治は出來て居るのであらう、日傳取人足を以てこの議場の外を騷がして、運査と喧嘩するといふやうな事が、何の立憲政治の狀態であるか、それは暴動ぢやないか。そんな事をやるならば議會などは要らない、綱

引でもさして、強く引張つた奴の方の言ふ事を聞くことにして、引張り會ひでもさした方が宜いぢやないか。議論を始めれば足をガタ〳〵いはして邪魔をする、それで言論の自由だの、議政の府だのといふ、あゝいふ事の結果になつてしまふといふのは、國民が政を根本から築き上げるといふ考へが無いからである。彼らにガタ〳〵やつて人の議論を妨害して、そんな事で勝つた負けたと爭うて居る、「とう〳〵彼奴言ふことが出來なくなつて引込んだ、大いに痛快であつた」とか、「一方は十五分立往生をして、とう〳〵言ふことは言はずして降りた」とか言つて喜んで居る、そんな事が何だ、子供のする遊びではあるまい。さういふやうな愚劣な思想を打破つて、どうしても政治の本は學問にあり、學問の本は大なる教から組立てゝ行くといふ所に眼覺めて來なければならぬ。無論それは法律も經濟も要るけれども、根本は偉大なる教に依つて築いて、その下に政治なり經濟なり色々の事が働いて行くべきである、根本は國民の人格、政治家の人格、すべての人格を作る爲に、大いなる教が偉然として存立しなければならぬ。それを仰せられて居るので、この三つの教が政に大なる益を與へるものだと言はれて居るのであります。

尙ほその教の事を論じて、その國、その人、その時に適するやうに之を運用しなければならぬと言はれた、これは實に結構な事であつて、教の本體は三教である、體道として萬世動かないものはこの三教の鼎立である、併しその用道として活用する所のものは、國と時と人とに適合するやうに施設して行かなければならぬといふ事を仰せられて居る。さうしてこの事は教の本體の中に示されて居る事であつて、教それ自身が國を見定め、時を見定め、人を見定めんければならぬ、これは實に立派な事だと思ふのであります。日蓮聖人の御主張がやはりこの三教融合の大思想で、國體を擁護し、又仁義忠孝の教を盛んにして、一面には佛教を發揮された點に於て日蓮聖人は三教を統一的に發揮したる所の大思想家であります。その應用に至つては盛んにこの國を論じて、所謂立正安國論を作り、又宗教の五綱の中には、教と、人と、時と、國と、その教の弘まる順序を擧げて五綱を立てられた、即ち教機、時、國、序といふのがこれである。聖德太子もこを明に言はれて居るのである。教は三教融合の大教義を打立てゝ、さうして日本の國に合ふやうに、日本の人に合ふやうに、又今日の時に合ふやうに應用しなければならぬ、その教が弘つて行く所に自ら前後の序といふものが立つて行くから、宗教の五綱が自ら聖德太子の憲法發布の場合のお言葉にあるのであります。日蓮聖人はこの宗教の五綱は、法華經、涅槃經に依つてお定めになりましたけれども、やはり達人の意見といふものは暗合するものであつて、聖德太子のお考へも日蓮聖人の御主張も皆同じ點に注意されて居るのであります。法の相は能く見定めなければならない、日蓮聖人のお言葉は一層明かであります。

彼の國によかりし法なればとて、此の國にもよかるべしとは思ふべからず、法は國を鑑みて弘むべし。

と言はれた。又時に就ては撰時鈔をお作りになつて、先づ時を撰ばなければならない、「雞の夜明けに鳴くのは宜いけれども、夜中に鳴けば何か不吉な事があるといふやうなものであるから、時を知つて行かなければならぬ、非常に時に力を入れて撰時鈔上下二卷を作り、その他遺文中には時に關係したる幾多の文章がある。他の宗旨のように時も何も構はない、何時でもボタ〳〵やつて居るといふのではない、「國に紙充滿せんに皮を剝いで何かせん」手の皮を剝いでそれにお經を書いたといふ事が、昔は功德だと思ふが、併し今三錢か四錢で紙が澤山購へるのに、手の皮を剝いで字を書いて何の功德があるか、それより出版事業でも熾んにして、文書傳道でもやつた方が宜いといふやうに、活きた宗教の活動を教へて來たのである。又日本の人に就ても日蓮聖人は、決して日本人は罪深い者であるとか、詰らない人間であるとかいふ事は言はない、日本人は皆これ菩薩なり——日本人の天職に觀みたならば、決して粗末な教を與へて置くべき者でない、醍醐を味ふべき國民であると言つて、一番善い教を味ふべきものである、それに蘇味といつて粗末な教を與へるといふ事は間違つて居ると言はれた。今の人間が威張るのは唯だ威張るのであつて、この善き教を受入れるべき國民だといふ自覺が無い、現代人は非常な間違つた考へで空威張に威張るやうになつて居る、そこに危險の玉子があるのである、「今日の時代は宗教の教ヘンか要らない、俺がやる」といふこの飛上り連子になつて、腕を捲るやうになつて居るから、何をするか分らぬ、抑ゝ出來損つて居る頭腦が威張るのであるから……。先づ教の前には羊の如く柔順でなければならぬ、而してその教の命ずる所の正義に從づて進む時、剛健獅子の如き勇猛なる觀念に依つて進まなければならぬ、それを教に對しては狼の如く虎の如く反抗して、さうして正義に就て進む時には、猫の如く鼠の如くなつて逃げやうとするが現代の有樣である。詰らない所に威張つて「教などに頭を下げるのは屈從道德である」ナンと言ひながら、五

十錢の錢の爲に頭を下げるのは新しい文明だと思つて居る、「貴樣、五十錢の錢をやる」と言へば「へー有難うございます」と言つて頭を下げる事を知つて」教の爲めに頭を下げるのは屈從ちやといふに至つては、その低劣野卑の程度恐るべきである。又學者としてそれを編つて居る者がある、今日國家を誤る者は學者なりと言つても差支ない位、學者は批評の的となつて居る、それは決して學者を侮蔑して言ふのでは無い、學者が今日は自覺せられんければならぬ、公平なる批判の中に、學者階級なるものは無駄な事に沒頭してこの時代を救ふ力無しといふ非難が起つて居るのであります。」聖德太子もやはりその事を言うて居られる。

それ博識なりと雖も只だ書籍の空言を知つて、未だ官て政に豫らず、(中略)是の如きの法は能く是の如きの機を化し、是の如きの法は是の如き機に合はず、是の如きの機は是の如きの法に非らずんば伏せず、是の如きの機は是の如きの法に依つて邪を增し及び厥の法の相は、その國に於て、その時に於て相應することあり應ぜざることとあり。

その意味合を十分學者が研究しない、唯だ自分の學んだ所の書物の空言を、今日の言葉でいへば直譯的に持つて來て、それが果して我國の今日の時に適合するや否やといふ事に就て、深き考察を遂げない所のものであるから、博識なりと雖もそれは書籍の空言を受賣して居るものである、故に新の如き者に國家を委せる事は出來ないと仰せられて居る。實に今日がその通りではないか、試みに佛教の復活に就て考へたならばどうであるか。「それは國に宗教無かるべからず」「無かるべからずといふならばどの宗教ぢや」「それは一寸待つて呉れ、今研究するから……」「何時返事が聞かれるか」「マア待つて呉れ、何時とも言はれん……」「兎に角理想的宗教でなければならぬ」「理想的宗教とはどんなものだ」「一寸待つて呉れ」……少しばかり言うては待つて呉れ待つて呉れと言つて、さつぱり人心を導くことは出來はせぬ。大勢の學者は人心の歸嚮する所に向つて如何なる指導を與へつゝあるのであるか、今や宗教心を失つたことが現代の文明を禍ひしたる本とまで言はれて居る、「その宗教心の復活に向つてあなたはどういふ信仰を有つて居るか」「一寸待つて呉れ、必要だとは思ふけれども、未だそこ迄はやつて居らん」といふやうなもので、さつぱり相談にならぬ、それは實に學者の反省されんければならぬことだと思ふのであります。

又その學ぶ所に餘して他を攻擊するといふやうな考へがあつて、西洋の學問をやつた者は一概に東洋の惡口をいふ、耶蘇教をやつた者は佛教のお經の一卷も見ないで、唯だ佛教とは野蠻なものぢやといふ、それは實に滑稽なものである。何でもない事でも耶蘇教にある事を非常に有難がつて居る、「新ういふ事が佛教にありますか」「そんな事は何ボでもある」「本當ですか」「此處にこの通りある」「ハ、ーン」と言つて驚くやうな事ばかりやつて居る、佛教と言つても涅槃經ある事を知らず、華嚴經ある事を知らず、法華經ある事を知らず、唯だ三世相の一卷位が佛教だと思つたり、誤魔化し者がやつて來て詰らぬ事を言つたものが佛教だといふやうに思うて居る、日蓮聖人のことと言つても「日蓮聖人が書いた本がありますか」「それは澤山ある」「へー」と言つて、本があるといふ事で早や吃驚して居る、「日蓮聖人に本尊がある」といふと「へー、本尊がありますか、」と言つて驚いて居る。法華といへば唯だ危險のお面師樣テント言つてやつて居る英雄崇拜の迷信だと彼等は考へて居る、日蓮聖人には本尊上の非常な立派な思想があるといふやうな事を聞くと、眼を丸くして居る、實に滑稽なものである。それが壇上に立つて佛教を罵るのである その裏面に這入つたならば、彼等は佛教に對しては全然無意識なるものであつて、而かも憶面も無く佛教を罵るのである

それを聖德太子が戒められた、さういふ己れの學ぶ事に慢じて他を攻擊するといふことはいけない。

神道は是れ我國の本よりの教、何れの道か夫れを非らむ。維神の教に對しては、如何なる學問をやらうが、宗教をやらうが、我國家のあらん限り國體の中堅となつて現れて居る、この維神の教は否定することは出來ない。その代り又維神の教を笠に着て迷信などをやるのは最も慎むべき所である、神道といふ名に依つていろ〳〵低級な宗教を立てるのは、最も危險な事である、丁度袞龍の袖に隱れて惡い政治を行ふことは最も憎むべきが如く、維神の名に隱れて低級なる迷信を編ることほど憎むべきものはない。故に

佛典は天竺輪王の教。

と書かれて居る、これは實に良いお言葉であつて、この一句を以て聖德太子が佛教に精通されて居る事が分る。德川時代の儒者などは、佛教は厭世的であるとか、悲觀的であるとか言つて攻擊したけれども、聖德太子は「佛典は天竺輪王の教である」と書かれた。輪王の教といふのは何かといふと、非常な理想的の王樣が出て、世界を精神的文化、理想的文化に造り上げるといふ大觀念の下に起つて居る教である、死んだ先きの未來教でもなければ、國家を無視したる超越的なる

ものでもない、轉輪聖王が出て人類の文明を理想的に造り上げる所の、その理想と實現の方法とを教へて居るものが佛教であると言はれて居る、如何にもその通りである。日蓮聖人の立正安國論などと同じ意味である、又お經で言へば守護國界主經の如き、その通りの事が詳しく說かれて居る、實に立派な輪王の理想の文明といふものが佛教に依つて示されて居る。恐くは將來必ずやこの佛教の思想で世界が導かれるであらう、今はこの佛教を研究もしないからだけれども、段々佛教を知る人が出て來たならば、人類最高の光が佛教であるとの定論に達するのであらう。

孔孟の教は皆中に的る所の大法なり。

と仰せられて、所謂儒教は中庸といふ事を教へて、偏らない所の宜きを得て居るものである、儒教ぐらゐ常識的に中庸を保つた道德はない、西洋の或は功利主義であるとか、或は快樂主義であるとか、直覺主義であるとか、個人主義であるとか、國家主義であるとか云ふやうな事は、偏傾して一片々々をいふのである、だから直きに倒れてしまふ。株式の相場みたやうに、個人主義で行き居るかと思ふと直きに弊害が出るから、今度は國家主義ぢやといふ、國家主義で行き居ると又帝國主義、軍國主義が出て來て、これではどうもならぬ、社會主義ぢやといふ、社會主義で行くとバルチヂンが出て來て、之はどうもいかぬ人道主義ぢや、人道主義ぢやといふ、さうしてヘナ〳〵言ひ居ると又やられて、是れはどうもならぬといふ、そんな事は柳ょ始めの思想が偏傾した一片に過ぎぬからである。所が儒教は中庸を說いたものであるから、即ち君子は中庸に於てすと言つて變らない、小人は偏る、個人の事を考へたら個人だけ、丁度今の人が親孝行といふ事を古い〳〵と言つて親孝行を否定するけれども、直ぐ自分が親になる時が來るのが分らぬ、嫁を貰つたならば直き子供が出來て親になるのである、その時に子供が親孝行などは要らぬと言つたら自分はどうなるか。何時までも自分が子であるやうに思うて居る、その淺薄なる觀念といふ者は笑ふに堪へたる事が多い、であるからグラ〳〵して停止する所を知らないのである。

要するに神儒佛の三つの教は、如何に善いものであるから、何處までも大切にして行かなければならぬ。中に我が國體に合はぬ所の一二の點がある、それは『孟子』の中にも「天下は天下の天下なり」といふやうな事もあるけれども、それは捨てゝその他の千萬の善いものを用ひよ、「その一二を捨てて他の千萬を用ひよ」と仰せられた、この點を考へなければならぬ。千萬採るべき點があるのに一二の合せざるものがあるからと言つて、千萬を捨てるといふ事はいかない。佛教を喇つたのも、お經の中に非常に善いものがある、そのお經を捨つてしまつて、少しばかり惡い所を發見して、佛教は皆いかぬと言つて反對しやうとして居る、さうして他の澤山な立派なものに對しては盲目になつて居る。私は始終言ふのである櫻ン坊が澤山箱の中に這入つて居る、五千も一萬もある、その中に二つか三つ腐つたのがあるからと言つて、「こんな櫻ン坊は捨てゝしまへ」といふやうなものである、その腐つた物だけ捨てゝあとを洗つて食へば、何千といふ櫻ン坊は皆立派なものである、一つや二つの腐つたのがあつたからと言つて、他の千萬の貴き物があるならば之を用ひなければならぬぢやないか、若しその事を忘れてこの三教の中の一つでも捨てたならば決して社稷は永く續かぬといふが、この詔の結文であります、即ち

世は穩儼ならずして社稷は必ず永からず。

と言はれて居る、世の中は穩かでなく儼かでもなく、不穩にして不景氣になり、世は人氣が荒くなつて生活は不安定になり、さうして遂には國家も亡びるといふ。三教を捨つる時段々世は穩儼ならず、社稷は必ず永からずといふ露西亞の覆轍を履むことは間違でない。その時になつて後悔しても及ばぬ事である、維新の當時よりこの偉大なる所謂天地の大法に基いて定められた所の維神の教、聖賢の教、佛陀の教を罵つた、その罰だけでも今日の果を受くるは當然である、千三百餘年の間日本の文化を開いたものはこの三教ではないか、楠正成はどうして出來たか、この教に依つて法華經を學び、論語を學び、國體の事に就て感奮して楠公が現はれたのだ、この教がなかつたならば、楠公は無い、乃木將軍はどうして出來たか、やはり山鹿素行を通じて學問をした、山鹿素行はどうして出來たか、彼は儒教を學び神道を學び、學問することに因つて出來た、その教の本といふものは、皆法華經を讀むとか或は大學を讀むとか、國史を續くとかいふ三教の教化を經れて、一人だも人らしい者は出來たものではないのである。この一切の人物の出來た本を忘れてしまつた、さうして立派な人が出て來る譯が無いぢやないか。所が今尙ほそれが分らぬやうだ、神道の事でも本當は分つて居らぬ、唯だ敬神の觀念ナンと言つても、神社の祭禮に生徒を伴れて行つて玉串を捧げるが、それだけで行く譯のものではない。もう少し精神のある所を徹底的に國民に注込む運動が起つて參らんければ、即ち世は穩儼ならずして社稷は必ず永からずと仰せられた事になつて行く。

世の中と佛教

陸軍少將　野澤悌吾

総て對手が悪い者である、自分を磨める者であるといふ考へを以てこの社會に對して行つた時には、さういふ憐れなる道程を取つて落ちて行かなければならぬものでありますが、佛教の方、また東洋の思想に於ては、社會を觀て行くのにさういふ方面ばかりは觀ない、成る程社會といふものはお互に利害が衝突するが故に尙更ら徳を以てお互に心を和らげて行かなければならぬといふ事を考へて居る、人間といふ者は本來さう悪い者ではない、成る程利害を爭ふ時には隨分爭ふけれども、併ながら「浅る世間に鬼は無し」で本當にお互に精神を開き合つて交際つて行つたならば、世間に鬼は無いのであるといふ事を考へて、始終善い方面を見て、成るべく善い方面を餘計に發達さして行かうと考へて居るのが東洋の思想であります。それ故に儒教の方面では仁とか義とかいふ事を教へて、さうしてこの利害の衝突を調和して行かうとして居る、佛教の方に於ては更に之を徹底的に考へて、「衆生恩」といふ事を說いて居る、さうして社會の總ての大調和を行つて行かうとして居るのである。衆生恩とはどういふ事であるかといふと、お互この世の中に立つて行きますには、自分一人がえらさうな顏をしたと言つて、自分一人の力で活きて行けるものでは無い、例へば豆腐屋さんが豆腐を拵へて街道を「豆腐々々」と言つて觸れて歩く、この豆腐といふ物は自分が骨を折つて造つた物である、買ふ方は錢を出して買ふのである、何も自分は人の世話になつてやるのではない、向ふが錢を出すから此方が豆腐をやる、自分が骨を折つたものであるから人は當然錢を出して買ふべきものであると言つてしまへば、何でも無い問題である、けれども豆腐屋がこの豆腐を持つて歩くのには道路を歩かなければならぬ、この道路は誰が造つたか、この道路は市の全體の人が金を出して拵へたのである、この道路を築き上げるには、澤山の工夫が汗を流し骨を折つて拵へて呉れたのである、この道路といふものが無ければ、豆腐ばかり澤山拵へて見た所で、持つて行き場所が無い、又買つて呉れる人があればこそ豆腐が賣れるのである、自分ばかりえらいと考へて居つても、一つの商賣をするのでも一切衆生の恩、社會の恩に依らなければ商賣は出來ない、又私共が自分の身體を今日此處まで運びますのでも、芝の宇田川町から電車に乗つてこの終點まで來たのでありますが、「この電車に乗るには七錢五厘出せば乗れるのだ、これは自分の金で自分が乗つて來たから自分の力だ、」斯う考へて行く事はどうしても出來ないのである、この電車といふものが非常どうして出來たか、電車が出來る迄には第一電氣といふ物を研究した澤山の學者、これ等の學者が瞬味噌を絞つて、それが爲めに壽命を縮めた人もあるであらう、又この電車が斯ういふやうに出來上がる迄には、多くの資本家が資本を注いで中には隨分手を焼いた人もあるであらう、それが漸く今日事業として經營して損の行かないだけになつて來た、この電車の箱を拵へるには多くの技師多くの職工が力を盡し勞力を盡して、或はそれが爲めに職工諸君で足を傷めた人もあるであらう、手を傷めた人もあるであらう、壽命を縮めた人もあるであらうといふ事を考へて見ましたならば、七錢五厘で乗つて來た電車といふものは、唯だ七錢五厘で乗れたものではない、昔から電氣といふ物の發明から、今日に至る迄の多くの學者の瞬味噌と、多くの職工の生命及びその脂汗とを以て成立つたこの電車、その電車に乗せられて私は此處まで參る事が出來た譯である。斯ういふやうに、私共は一つとして人の恩に依らずしてこの社會を渡つて行く事は出來ない、之を佛教では衆生恩と申すのであります。

衆生恩は單にさういふ浅い所ばかりを說いて居るのではない、モウ一層佛教の奥深い所の道理に照して、深くこの衆生恩を味はつて行く事が佛教に於て大切な問題となつて居ります。それはどう云ふ事であるかと申すと、人間といふ者は大體人生五十年と昔から言うて居るが、今日は世界の學者の統計に依ると、先づ平均三十六年しか生きないと言はれて居る日本などは少し衛生が屆かんと見えて、三十四歳位の平均になつて居ると聞いて居ります。最も長く生きる人は西洋あたりでは百四十歳位まで生きた人がある、百三十になつてからお嫁さんを貰つたといふ老人もあつた。佛教などは先づ壽命の長いのを百二十五と立てゝ居る、大隈侯などはさういふ事を眞似をして百二十五まで生きると言つたのかも知れぬ。兎に角壽命の長短はあるけれども、平均をして見ると洵にあはれ果敢ない人生である、短かい人生である、併し吾々はこの短かい人生を以て吾々の一生として居るだけではない、この人間として生れて來る迄の過去といふ過ぎ去つた時代があ

る、又未來といつて是から先に通つて行かなければならぬ時間を有つて居る、その時間は限り無く長い時間である。人間といふ者は突然無い所から出て來て、さうして又突然有る者が無くなつて行くのではない、人間といふ者はそこに古い昔から長い終來に亘つて滅びない所の、死にもせん生きもせん一つのものを有つて居る、即ちこれは眞の我である、分り易い言葉で申すならば靈魂とでも申しますか、さういふ所謂不滅の生命といふものを有つて居るといふ事を、佛教の根本の深い學問の上から、又佛の大智慧の上から證據立てゝ教へてあるのであります。左樣にして人間が過去の古い時から終來の長い間に向つて、ズツと道程をして行く間に、お互が此世に人間として現れて來た、併しこれは何も因緣無しに寄集つて居るものでは無い、袖振り合ふも他生の緣であつて、一つの家庭に一緒に生れて來るといふのは、過去つた世の中に於て非常に深い〳〵因緣を結んで、此處に夫婦となり、親子となつて居るものである、三行半さへ渡せば他人ちやと云ふやうな考へを持つて居る者が多いけれども、夫婦と成る迄には過去に非常な長い歷史を通して、因緣が結ばれて此處に夫婦となつて現れて居るのである、今三行半を渡して離緣をしてしまつても、それだけで問題は終るものでない、將來即ち長い未來に於てやはり色々の緣らがつた關係をこの女と結んで行かなければならぬのである。殊に一般の社會から申しますと、私共があなた方と同じくこの土地に住み、同じ所で斯うして寄り合つてお話をするやうな間柄になつて行くのはやはり過去に於てそれだけの深い因緣があればこそ此處に御一緒になつたのである。一ツの會社の資本家となり職工となつて行くのも、技師となり社主となつて行くのも、總てこれは非常な深い因緣を過去に於て有つて居るが爲めに、現在に於てさういふ深い關係が起きて居るのであるといふ事を佛の大智慧の上から照して教へて居るのが佛教であります。單に人間の間ばかりでは無い、犬を見ても烏を見ても、これはやはり因緣因果の法則に依つて六道輪廻と申して、或は烏と生れる事もあらう、或は人間に生れることもあらう、色々の物に生れかはり死にかはつて行くといふ事を考へて行つたならば、單に吾々此處に集まつて居る人間が非常な因緣を結んで居るばかりでは無い、屋根の上にカアと啼いて居る烏も、或は吾々と非常な深い因緣を有つて居るかも知れない、實際も有つて居るのであると教へるのが佛教であります。日本の古い時代の行基菩薩といふ名僧の詠まれた歌の中に、

ほろ〳〵と啼く山鳥の聲きけば
父かとぞ思ひ母かとぞ思ふ

自分の父母は既にこの世を去つて、年久しいことであるが、今ほろ〳〵とこの山の奥に山鳥が啼く、あの山鳥が私の父ではなかつたか、或は自分の母ではなからうかと、斯ういふ思想に入つて行くことになる。儒教に於ても「仁禽獸に及ぶ」と言つて、優しい心を以て禽獸に對して行くといふ事は、聖人の德として稱へて居るのでありますけれども、佛教の方ではその精神が一層深く入つて行つて、犬であつたかと言つても或はこれは前世に於ける自分の女房であつたかも知れぬ、自分の父であつたかも知れぬといふ思想を以て禽獸に對して行くのである、故に仁禽獸に及ぶといふ位の程度のものではない、之を撲るとか虐めるとか、酷い事をして行くやうな思想には、どうしても入れないのであります。

斯樣にして社會全體を見渡して行つた時に於て、吾が敵とすべき者は一人も無い。殊に吾が前に立つて居る所の人、社會の全體の人といふ者は、その親の歲に洵に麗はしい心を持つて居る、自分が若し眞心を以て是に對して行つた時には、その人が如何に拗ける人であつても、必ず親切になつて來る者であるといふ、根本の道理に基いて世を渡つて行くのであるから、そこに警戒をするとか、爭ひを起すといふやうな事は基にして居ないのである。歐羅巴の方では前にもいふやうに、お互が競爭を仕合ひ、お互に叩き合つて行くのである、まかり間違つたならば直ちに足を掬はれるのである、「人を見たら泥棒と思へ」といふこの見方に依つて總てを論じて行くのであるから、そこに法律といふやうなものを喧ましく論じて、權利義務の關係ばかりを以てお互ひに相對して行く事になる。そこで西洋は非常に冷やかな關係を以て一切の人が交際つて行く、東洋の方はどうかと言へば、非常に溫かい精神を以て交際つて行く事になる。此處は私共文明の非常な分岐點であらうと思ふ、私共が佛教の尊いことを見て參ります のも、その點に非常に力を置いて觀て居るのであります。佛教が唯ださういふ事を人を騙すために教へたといふのではない、根柢の深い學問の上から、さうして釋迦如來の正覺の大智慧の上から之を徹底的に教へて、吾々を溫かい方面に導いて居る、此處が洵に東洋の思想の尊い所であり、佛教の最も大切なる點であると考へるのであります。

世の中の人間に對して行くのに、善い方面を觀て行くか、惡い方面を觀て行くかといふ事に就て、そこに非常な變りが出來て來ると云ふ事は、これ迄の歷史上の事實、いろ〳〵殘つて居る所の物語等に依つて澤山之を知ることが出來るが、

加賀の前田侯に利常といふお方があつた。この方は洵に心の廣いお方であつたが、その頃前田家の臣下の大身に若城小兵衛といふ人があつた、この人が禁獵をされてある場所に鐵砲を持つて行つて、自分が大身であるといふ誇から暇を拳取つて來た。この事が利常侯の耳に入りまして、利常侯は「若城を呼べ」と仰しやつた。小兵衛は之を聞いて「サアしまつた、これは蛇度命を奪られるに違ひない」といふので非常に恐怖をして御前に罷り出た。其時に利常侯は顏色を和らげて「お前は雁を撃つたといふ事であるが左樣か」「仰せの通りでございます」「何羽撃つた」「二羽撃ちました」「二羽を一箇の彈丸で捕つたか、或は二發の彈丸で捕つたか」「私はバラ彈を一發撃ちまして二羽捕りました」「それはえらい腕であるな、宜しい、それだけを聞く爲めに呼出したのである、退れ」といふ事で、小兵衛は別段のお咎めも無く濟んだ。斯樣にして若城小兵衛は命を奪られると考へて出頭したのに、殿樣のやさしい言葉を聞いて歸つて、泌々と自分の心に考へた。「ああ濟まぬ事をした、殿樣の法度が出て居るのに、自分が大身の故を以て奢り驕つて鐵砲を撃つたといふ事は、如何にも相濟まぬ事であつた、今命を奪らるべき場合であるのに、殿樣がやさしい心を以てお許し下すつたのは、實にこの御恩山よりも高く海よりも深い事である、之を機會に生涯自分は殺生といふ事をやめて、生れ變つた精神を以て命がけに忠義を勵んで行かねばならぬ」とスツカリ決心をして、それから以後御奉公を大切にして行つたといふ事であります。この利常侯といふ方は洵にえらい方で、さういふ事がモウ一ツ書物の中にあるのを私は見て居る、それは山崎闇齋と言つて名高い武勇の武士である。この人の祖父さんは山崎長門といふ人で、これも大豪を食んで居る武士であつた。利常侯が年老ひて小さな隱居所を造られて、そこに池を拵へて澤山の鯉を飼つて置かれた。そこへこの長門が行つてその鯉を一寸失敬をして來た。この事が利常侯の耳に入ると、どう仰しやつたかというと「あゝ山崎長門といふ者は、その祖父さんの武勇を襲いで洵にえらい者である、自分が禁獵してあるこの池に來て鯉を釣るだけの勇氣のある者は、恐くは他にはあるまい、彼の祖父は大阪陣に於て非常な武名を擧げた立派な武士であつたが、若し戰爭でもあつたならば、この孫たる山崎長門も非常な武勇を現はす武士であらう」と仰しやつた。この事が山崎長門の耳に入つた時に、彼は汗を流して恐入つた、さうして更に殿樣の御恩の深き事を考へて涙を流し、爾後益々忠勤を勵んで行つたといふ事を傳へられて居ります。若しこれが人間の惡い方面を觀て行くならば、「彼は怪しからん奴だ、苟も一國の主たる殿樣の出した法度に背く我儘者、横着者である、之を放つて置いたならば他の者のしめしにならぬから、先づ切腹を仰付けるか、或は改易を仰付けて罰しなければならぬ、さうしなかつたならば命令といふものは行はれず、政治が紊れて行くであらう」、今日の思想ならばさういふ方に走つて行くのでありますけれども、この利常侯といふ方は非常に慈悲深い寛大なお方でありましたから、人間の善い方面を觀て、その人間が悔ひ改めて行きさへすれば宜しい、罪を問ふといふ事は本當の趣旨ではないといふ考へから、それに反省を促がされた。その事に依つて山崎長門も死ぬべき命が助かり、若城小兵衛も死ぬべき命が助つて、二人とも前田家の爲めには命がけに忠勤を勵んだと云ふ事は、これが又前田家の爲めに非常な利益を爲して居る譯であります。

左樣な例を引いて行くならば非常に澤山あることでありますが、東洋の思想は即ち大乘佛教の思想に立つて人の善い方面を觀て、之を成るべく育てゝ行かう、國家を觀ても國家の良い方面を育てゝ行かう、社會を觀ても社會の良い方面を育てゝ行かうといふ事に從來努めて來たのであります。所が今日は西洋の思想が段々入つて來て、小乘的に惡い方面を先に觀て、これに對して警戒をせよ、これに對して武裝をして歩つて行かうといふ方面に、段々政治であらうとも、法律であらうとも、經濟の組織であらうとも、總てのものがさういふ風に傾いて來たといふ事は、果して文明の爲め幸ひでありませうか、或は禍ひであるか、此處を餘程お互に考へて行かなければならぬ大切な問題であると思ふのであります。

斯樣に申したならばあなた方の中には、成る程吾々は優しい考へを以て世の中の人に交際つて行きたい、併し遺憾ながら今日は向ふがやさしい考へを以て來て呉れない、此方がやさしい考へを有つて行つても、向ふは却つて自分を更に騙かして惡い事をしやうとする者が多い、斯ういふやうに最早や人間が惡くなつて來た以上は、吾々もやはり警戒をして行かなければ、迚も世の中は渡れない、忽ち金は捲上げられてしまひ、非常な苛い目に遭ふであらう、斯ういふ風にお考へのお方がありませうが、併しさういふ考へを以てお互ひが行つたならば、やはり何時まで經つても立派な文明といふものは成立つものでは無い、何時まで經つても溫かい社會といふものは出來るものではない。寧ろお互ひにさういふ警戒心を持ち心に武裝をしてかゝつて行つた時には、遂に世の中は大破裂

をして、露西亞のやうな狀態に陥らざるを得ないのである。人間に對してお互ひが眞心を以て交際つて行つた時には、所謂渡る世間に鬼は無しであります。あなた方は私よりは能くその事實を御承知でありますが、彼の五郎正宗でありますが、彼は小さな時分から非常にやさしい心を有つた少年であつた、その父の許に引取られて、繼母のおあきの手に依つて苛酷な育て方をされた、おあきは自分の子に新太郎といふ子供がある、その子供は非常に可愛がるけれども、五郎を見ると非常に憎んで、自分の亭主の居らない時には色々な事をして苦しめる、或は殴いたり、或は抓つたり、年中生爽の絶える事の無いやうな苛酷な目に遭はせて居つた。それでも五郎は少しも母を恨むことなく、お母さんは今自分に對して斯ういふ辛い事をなさるけれども、本來やさしかるべきお方である、これは私のやり方が惡いからあゝ云ふ風にせられるのであらうといふので、何處までも孝行の心を以て是れに盡して行つた、けれどもおあきの性根は非常に曲り苦根つて居つて中〻直らない。遂におあきが病氣になつた時に、五郎は雪の降る夜に裏の井戸端に出て水を浴びて、神佛に自分の命を捧げてこの母を助けたいといふ事を祈つた、此事がおあきの耳に入つたけれどもおあきは尚ほ改心をしない、却つて佛を起して益〻五郎を日がな夜がな虐んで行くといふやうな有樣であつた。けれども如何に苛い事をされても、五郎の心は少しも變らず、益〻やさしい心を以ておあきに對して行つた。この事がおあきの實父の耳に入つた時に、おあきの父は、苟も武士の家に生れてさういふ極惡非道な事をやつて繼子を虐めるとは何事であるか、吾が家名を汚す者である、父の顔に泥を塗る者である、生かして置く事は相成らんといふので、血眼になつて刀を提げておあきの所に行つて、おあきを前に置いてそこに坐らして、一々其罪狀を並べて「何故にお前はさういふ極惡非道な事をやるか、今日こそ生かして置くことは相成らぬぞ」といふので刀を振り上げた、おあきは流石に命が惜しいからバタ〳〵ッと表に飛出した。けれども遂に石に躓躓いてドッと倒れた、父はその上に乘かゝつて將におあきに一刀を浴せやうとする刹那、五郎は後の方からトッ〳〵ッと飛んで來て、今おあきが殺されやうとするその脊中の上に乘かゝつて、自分みづからその父の刃を受けやうとした。流石に鬼の如きおあきであつたけれども、この五郎のやさしい眞心の輝きに依つて、おあきの魂の底にある所の佛性といふか、或は明德といふか、その淸らかな心に五郎の眞心が通じた時に、このおあきが鬼から變じて佛になつた、「あゝ惡かつた、今迄自分が自分の產んだ子供でないといふので五郎を非常に苦しめ虐んで行つたのは全く自分の過失であつた、斯ういふやさしい五郎に對して自分が罪を重ねたと云ふ事は、如何にも相濟まぬ事であつた」と涙を流して後悔をして、その後は立派な母親として一生を送つたと云ふ事であります。東洋の教と云ふものは總て此處に基けられて居る、一切の物の善い方面を觀て、假令自分が損をしても、眞心を以てやさしい心を以て交際つて行つた時には、渡る世間に鬼はない、家庭も洵に暖かい家庭が出來る、社會も溫かい社會が出來てそこにお互ひの幸福を味つて行く事が出來るのである。これに反して若し人の惡い方面ばかりを觀て、人を見たら泥棒と思へといふやうな考へを持つて行く事になつたならば、社會といふものは遂に混亂の狀態に陥り、國家も遂に破壞せられて、國民全體が非常な災禍を受けなければならぬものであると云ふ事を教へてあるのであります。

法華經の中に常不輕菩薩といふ方の事が書いてあります、この方は釋迦如來が未だ印度に生れてお出でにならぬ前に、嘗て菩薩行をなさつた時に、常不輕菩薩といふ名を以て菩薩行をなさつて居らつしやつた事がある。その時にこの常不輕菩薩は、どんな人を見ても必ず之を拜む、但行禮拜と言つて但だ禮拜を行ふ、誰を見ても掌を合せて拜む、さうすると拜まれた所の泥棒であるとか酔ぱらひであるとかいふ者は氣味惡がつて「この馬鹿坊主何をするか」といふので之を撲る、撲られると逃げて行つて又拜む、「自分はあなた方を決して馬鹿にはしない、あなた方を尊ぶのである」と言つて掌を合せて拜む、「何故に尊ぶのか」「お前方が若し菩薩の道を行つて佛道を勤んで行つたならば、必ずや佛と同じやうに成佛をして尊い佛に成るのである、今はお前は酔ぱらつたり泥棒をして居る穢れ果てたる人間であるけれども、お前の心の奥底には佛と同じ性質を持つて居つて、之を研けば佛に成るのであるから、自分はその尊さを貴ぶのである」と言つて拜んだ。この思想が大乘佛教の根本精神であります。之を深い道理の上から、又佛の大なる智慧に照して教を垂れて行つたのが法華經であります、法華經の精神を以てこの世の中を導いて行つた時に於て、初めて社會には立派な文明が出來、人はお互ひに眞の幸福を味はつて行く事が出來るのであります。若し小乘の教のやうな低い教に立つて、西洋の思想の如く一切の者は惡い者であるとして行つたならば、遂に國家としても非常な災禍を釀し、社會としても非常な不幸を見るといふ事を吾々は深く考へなければならぬのであります。

さて人間が左樣に優しい心に立たなければならぬといふ事は、理窟の上では成る程分つたとしましても、どうしたならばさう云ふ優しい考へを以てお互ひに交際つて行く事が出來るかと言ひますと、之はどうしても宗教の力に依らなければならない、宗教の力に依らなければ、理窟では分つても本當に之を身に行つて行く事は出來ない、口に言うても行ふ事が出來なければ何にもならぬ。今基督教の方の名高い金森通倫さんといふ方がある、この方が政府の御用演說をして貯金の奬勵をして方々歩いた事がある、さうして方々に行つて何を仰しやるかといふと、一體この新切髪など〳〵いふものは、一々床屋に行つて刈る必要は無い、床屋に行くと二十錢三十錢といふ金を取られる、それよりも自分で梳と鋏を持つてジョキ〳〵やれば、少し位外形は惡いか知らんけれどもそれで濟むのである、さうすれば一箇月一週刈るとすれば三十錢なり四十錢なり貯金が出來るぢやないかといふ演說をした、大變理窟は宜しい。所がその聽衆の中に非常に眞面目な人があつて、金森さんの頭髪を見ると洵に立派に刈られてある、それから講演が終つてから先生の所に行つて、「先生、今日の御講演は洵に結構なお話でありましたが、あなた樣はそのお頭を御自分でお刈りになりますか」「イヤ、私は……これは床屋で刈つて貰つたのであるが、私は講演をする方の人間である、あなた方は講演を實際に行つて行く人であるから、私は自分で刈らなくても宜からうと思ふ」といふ事を申したさうであります。之は書物の中に書いてある事で、事實であるかどうか分りませぬけれども、口で言ふ事と行ふ事とが一致しないといふ事はいけない。吾々は理窟の上で考へるばかりでなく、之を實行して行く事が大切なる人の道である、所がそれが中々うまく行かぬものであるから、そこでどうしても宗教の力に依らなければ人間の道德性といふものは輝いて來ないのである。優婆塞戒經といふお經の中にも、宗教の無い人間の道德といふものは、膠を入れないで磨つた所の繪の具で繪を描くやうなものである、膠を入れないで色々の繪の具を熔かして描いたならば、少し採めると忽ち剝げてしまふ、膠を入れて磨ればこそ百年二百年後までも傳はつて、之は何萬圓の價値があると言つて持囃されるやうな貴い品物が殘るのである。道德といふものもその通りで、一時之はやらなければならぬと考へてやつても、完敎が根柢に入つて居らんければ、それを行ふ力が出て來ない、又今日は道德を行つても、明日になると橫着な根性が出て來て善い事は出來なくなつて來る、そこに宗教といふものがちやんと鞭を打つて、膠となり鞭となつて吾々を驅逐して、道德を行はして行く力を與へて行くのである。即ちそこに佛が見て居るといふ考へ、佛がこの世の中に實際に在つて、吾々を照覽して居るといふ考へがあつたならば、人間は道德を行ふ力が非常に强くなつて來るのであります。所が今日の歐羅巴の學問では、色々の方面から論じて行つて、天地宇宙には佛も無ければ神も無いものであるといふ方に學問が落ちて行つた、宗教の方面ではどうかと言うと、色々不理窟な事が書いてあるから、世間の學問の爲めに根底を動かされて來た、さうして「神あり」といふ事を本當に力說する譯に行かなくなつて來た。それであるから、「學問の方から言うと成る程神は無いかも知れんけれども、先づ吾々は有るとして之に向つて行くのぢや」といふ位の態度になつて、神といふものに對する力が薄らいで來たのであります。併ながらこれは學問の失敗である、宗教の失敗である。基督教が言ふ如く、天の愛の心がこの地上に漲うて居るならば、人間は幸福の生活を營んで行く事が出來ると言つて居る、その教が本當の權威を有つて今日まで輝いて居るならば、歐羅巴はものやうな混亂の狀態には陷りはしないのであります。この宗教といふものが權威を失つて、教の力が無くなつて來た所に世界の混亂が起り、國と國との爭ひといふものが增加して來る、遂には露西亞のバルチザンの行動のやうな惡ろしい殘酷な事をするやうな人間が多くなつて來る譯である。東洋に於ては學問の方から「神あり」といふ事を認めて行くのみならず、宗教の方面に於て、この學問に於て說く事をちやんと裏書をして證據立てゝ行く、宗教と學問とがちやんと一致して居るから、西洋の如く之をお互ひに敵視し、二つに別れて惡口を言ひ合ふといふ事は無いのである。法華經といふお經は殊に方便品といふ所に於て、この宇宙の大眞理を說いて、その眞理を說いて行くそこに直ちに佛を認めて居る、學問の上から佛を認めて來て居ります、吾々も亦久遠の佛である、今は腐れ果てたる、穢れ果てたる凡夫であるけれども、併ながら吾々の奧深い所には佛と同じ性質を有つて、長き今日まで來て居る者である、吾々は今日穢れて居るけれども、全く磨き出された立派な佛がやはり吾々と同じやうに、昔の昔の大昔からこの世の中に居るのであるといふ事を、學問の上からも證據立てゝ行き、宗教の方からもその學問に裏書をして行つたのが法華經であります。外界の佛即ち自分の眼の前の佛を見て行くと同時に、自分の腹の中に佛を認めて、この腹の中の腐つて居る佛を外界の佛の力に依つて磨き出して、眞の佛にして行かうといふのが法華經の教

であります。此佛に對するといふ考へを有つて行つた時に於ては、吾々は道德を行つて行く力が非常に强烈になつて來る、この佛を吾々が有難いと感ずる所に、吾々のやさしい心も育てられて來る、そのやさしい心を以て家庭に對し、或は社會に對して行つた時に於て、初めて世の中は先程申したやうな流に溫かい麗かなる世の中が出來て行く次第であります。

この意味に於きまして私共はこの「うどく寺」といふものを各所に動かして歩きまして、あなた方に佛教の信仰の復活をお願ひして居るのであります。佛教は日本に入りましてから既に千三百七十年の永きに達して居る、その間に名僧知識雲の如く出でて、非常な緻密な頭腦を以てこの佛教の眞理を研究し、印度に於ても發明の出來なかつた佛陀の精神、支那の學者が寄つて蟻つても未だ奥深い所が分らなかつた佛教の眞精神といふものを、日本に來て十分磨き出して、殊に日蓮大聖人に至つて遂に法華經の眞精神を明にし、本當の釋迦牟尼世尊の精神をこの法華經の上に現して教を垂れて居るのであります。斯の如く昔の人々が涙を流し血を吐いて傳へて來た所の佛教を、西洋の低い學問、根底の無い宗教が來た爲めに、之を打捨てゝ西洋の眞似をするといふのは、恰も自分の家の土藏にある大切なる寶を捨てゝ、他に物貰ひに出て行くやうなものである。私共はどうしてもこの東洋の文明の精神方面に於ける、宗教方面に於ける、道德方面に於ける長所を能く見まして、西洋のそれより遙かに優つて居るといふ事を信じて、之を復活して行き、そこに日本の尊い文明を吾々の力に依つて築き上げ、世界の模範となつて進んで行くといふ事が、吾々日本人の大切な務であらうと考へるのであります。この事は吾々が今さう考へるといふだけではない、吾々の祖先は皆左樣に考へて居つたのである、日本の國にこの立派な文明を築き上げて、さうしてその文明を以て世界の人類を救濟して行かうといふ事は、吾々の祖先が考へて居つた所であり、又日本の國といふものは左樣に大きな理想を以て建てられた國であるといふことは、既に最初に申上げた通りでありますから、どうか大正の御代に生れた吾々日本人は先づ以て佛教の復活を圖り、精神文化を益々育てゝ行く事に共にお力添せを願ふ次第であります。時間が大分移りますから、今夕は之を以て講演を終ります。

佛教信仰の正統

本多日生

一〇、實在を意識するの信仰

本日は教主釋尊の御涅槃會に相當しまして、御報恩の法要を營んだ譯でありますが、丁度この講題に於て「實在を意識する信仰」といふ一節をお話しする順序になりました。今日は御涅槃の日であるけれども、法華經を信ずる人の前には佛の在世であつて、今も釋尊は世にお居でなさるのである、信仰の眼に於てはあり〳〵と教主釋尊を拜し奉ることが出來る次第であります。涅槃の日に當つて實在の意識に關する講話を致すことは、如何にも不思議な廻り合せで、私は心ひそかに嬉しく感じて居るのであります。

佛教の信仰は色々別れて居り、宗派に依つて違つて居る事もありまするけれども、その違ひよりは、佛教全體に渡つて佛教の信仰が如何に教へられて居るか、又この長き佛教の歷史に渡つて、どう云ふ信仰の徑路を辿つたかと云ふ一切經に對する考察と、佛教歷史に對する考察の二方面に於て考へることが最も善いと思ふのであります。

この場合に一切經と言へば廣いことでありますけれども、大體の綱格といふものは定まつて居るので、最初華嚴經八十卷に亘つて、種々に說れて居りますが、その要點は釋迦牟尼佛の偉大なる事を示したのが華嚴經の本意である。諸君が華嚴經を取つて詳細に研究せられたならば、今私がお話する意味が洵に明瞭になるのである。華嚴經は最初どういふ事に依つて現れて居るかと言へば、釋尊成道のその時に、釋尊の御心の中に現れたその覺の有樣を說明したものである。釋尊が菩提樹の下に端座して、無上正覺を成就されたその瞬間に、その一念に現れたる內面の狀態を分析して說明したものが、八十卷の經卷となつて居るのであります。釋尊がお覺りなさつたそのお覺りはどんなものであるかといふ事を詳細に說明すれば、八十卷の經典となるのである。その中には無論

絶對の智慧あり、絶對の慈悲あり、絶對の活動ありといふ事になつて來るのであるが、殊に華嚴經では釋尊の不思議な力を說明して居るので、所謂「神變」と稱して居る。丁度法華經、序品に於て、「如來秘密神通之力」と仰せられたやうに、唯だ佛は智慧があり慈悲があるといふだけでなくして、力を有つて居られる、その力は限り無き絶對のものである、即ち神變の力を有するものであるといふ事を明かにして居るのである。その廣大無邊の御力の中から樣々なる事が現れて來るので、說教をなさるのも釋尊の御力である、賢い人に深い教を說いて導かれるのも、愚かな者に簡單な教へを與へてお導きになるのも、又唯だ說法のみに於て教ふ事の出來ない者には、樣々なる方法を用ひてお導きになることも、總て一切衆生を濟度し給ふことは即ち佛の力である。その力の內面には慈悲があり智慧があるといふ事は無論であるけれども、吾々が直接佛に救はれるのは佛の御力——佛力である。その事が華嚴經に於ては詳細に說かれて居る、而もそれは後に次第に力が發達して來るといふことではなくして、釋尊の覺られたその瞬間に總ての力がある、釋迦如來が爾後五十年の間、樣々なる說法を爲され、多くの衆生を濟度なさると云ふその力は、覺られた瞬間に具はつて居つたものである。引延せば樣々なる說教となり、樣々なる事跡となつたけれどもこの釋尊一代の活動といふものは、覺られた瞬間のその覺りの力の中に包含されて居るのである。「一念三世を包み、一身法界に遍し」と說いて、一と思ひの中に、過去久遠の昔より、未來永遠の後に至る迄の、その時間を超越したるものを捲いて以て佛は覺られたものである。長き時間の中に在る或る一點を抑へて覺つたのでなくして、この一と思ひの中に無限の時間を包括する覺りを有つて居る、即ち一念三世を包む所の覺りである。又一身法界に遍しと申して、一つの身體に現れては居るけれども、その一つの身體に於て全宇宙を包んで居るだけの大活動を有つて居るものである。故にその覺りを引伸せば、無限の時間に無限の活動をすると云ふ事に現れて來るが、それは今茲に有限の身を以て覺られた一瞬間の覺そのものゝ中に悉く包括して居るものであると云ふ廣大なる意味を說いて釋尊が覺られたといふその時に、總て何も彼も釋尊の御力の中に納つたと云ふ事を說いて居るのである。その覺られたる釋尊が尙ほ他の力を借らんければ衆生を教へないといふのでは覺りといふものにならないのである。釋迦如來が或は阿彌陀經を說いて、「阿彌陀の力に依らなければ我は汝等衆生を救ふ事が出來ない」、觀音經を說いて、「觀音の力に依らんければ衆生濟度が出來ない」といふやうな、そんな弱腰のものであつたならば、菩提樹下に無上正覺を成じて、一念三世を包み一身法界に遍しといふこの華嚴經の覺りは出て來ないのである。賢い者ならばもうその言葉の其處に、釋迦が絶對無限のものであるといふ事が分るのであります。それを形の方に現さうとするといふと、日本の奈良の盧遮那佛のやうに大きな姿に現して來て、釋迦如來は小さい佛では無い、斯ういふ大きな佛であるといふ事で、あゝ云ふ風に現したのであるが、それは唯だ形が大きいばかりではない、その佛の力、働きの廣大なる事を具體化して現さうとするから、頭が上にも大きく佛樣を造るといふことに現れて來たのである。何にも面白半分に大きくしたものではなく、大きな物を拵へて驚かしてやらうといふやうな意味でもない。釋尊は偉大なる者であるといふ渴仰の精神の伸びて行く所を、現し方が無いから、大きな盧遮那佛として現して居るのである。その中に佛教信仰の如何なるものであるかと云ふことが分るのである、即ち釋尊を廣大なる力の佛として信仰を捧げて行つたものである、それが華嚴經の中に與へられた信仰である。外に色々の事があつても、華嚴經を見れば皆この釋尊の廣大なる力を說明するに外ならぬものである。要するに菩提樹下に於て覺られた正覺の一念を說明されたものが、八十卷の華嚴經であります。

次に阿含經が四阿含經のみでも凡そ二百卷、その他阿含部の諸經を擧げれば二千卷に近い多くのお經を有して居るのが阿含部と稱するのであるが、この阿含部を諸君が又詳しく御研究になれば、佛教の信仰が如何なるものぢやといふことが能く分るのである。佛教は廣い意味の信仰を教へて、六念の法と云つて佛を念じ、法を念じ、僧を念じ、戒を念じ、施を念じ、天を念ずるといふ六つの事を忘れてならぬと云ふことになつて居る。念ずるといふ事は唯だ一生懸命に手を擊つて拜むといふだけではない、念は「憶念不忘」と書つて、忘れない事である。その時一時一生懸命になつても、始終忘れ勝であれば念といふ事にはならぬ、念は「念じ持つて行く」といふ事であるから、持つといふ事は心から離れないやうに、始終思ひ出し思ひ出して、行くことの出來るのが念といふ字である。故に「六念」と云ふことは、佛教徒は佛樣の有難いことを始終心に憶念し、佛の教の有難い事、佛の教を傳へて來れる人の有難い事、それから佛が定められた所の道德的規律、人は必ず施しをしなければならぬと云ふ事、その施しは金錢の施しもあり、又教の施しもあり、仕事の施しもある、正義を以て自分の力を國家に捧げるのも、軍人が身命を賭し

て國家に捧げるのも、自己を犠牲にして他を利するといふことは、皆是れ施しといふ事になるのである。佛教は廣い意味に於て如何なる方面からでも施しを忘れない、今の言葉でいへば犠牲の精神も、慈善の精神も、皆佛教では施しと云ふ一字で説明されて居るのである、それから今一つは天を念するといふ事である。「天」といふのは即ち諸天善神と云つて、梵天、帝釋、四大天王などと云ふ婆羅門教に於て有難がつた神も之を捨てないで、やはり大切にするといふ事になつて來て居る。左樣にして六つの事を念ずるけれども、併ながら佛教徒の宗教的信仰の目標は何處にあるかと言へば、「佛を念ずる」といふ事にあるのである。佛を離れて、佛の法を念ずることは出來ない、後代には佛を忘れて法を念ずるやうな觀念の人も出來たけれども、それは根本よりの間違ひである、釋迦牟尼佛を忘れて釋迦牟尼佛の教のみを奉ずるといふ事は出來ない。世間の學問であれば、その人を採らないでもその學説を採るといふことがあるけれども、宗教は人格と離すべからざるものであるが故に、釋尊を忘れて佛教を信ずるといふ事は無いのである。日蓮主義で言へば、日蓮聖人を捨てゝ聖人の御遺文だけを有難がると云ふ觀念には出て來ないものである。けれども終には間違つた者が出來て、日蓮聖人は捨てその言うた事だけ採ると云ふ者も無いとは云へないが、それは宗教的觀念から見て間違ひである。佛教では釋尊を捨てて釋尊の遺教を奉ずるなどと云ふ事は、後代に於ける滑稽なる間違ひである。學問ならさう云ふ事が出來る、「俺はあの人間は嫌ひだけれども、彼奴の言ふ事は一と理窟あると思ふから」といふので、學説だけ採つてその人間を捨てることが出來るけれども、宗教はその人間が氣に入らぬ位ならば、その教へは信ぜられないものであるから、人格と教と離すべからざる約束が宗教にはある。それ故に六つの事を念ずると言つても、阿含經を御覽になれば分る通り、何れも皆な佛を念じ佛を敬いて居るのである。阿含の狀態といふものは活ける釋迦牟尼佛の下に皆な集つて居るのであつて、お經と言つても今のやうに書物になつて出版したる物でない。釋迦如來の時々の説法を記憶して――それも今のやうな纏つたものでない、「嘘を吐いてはならぬ」といふやうな事でも、今日のやうに「不妄語」といふやうな唯だ空虛な形式の言葉を覺えて居るのではない、後代には坊さんが嘘を吐きながら「不妄語戒々々」と云ふやうな事を言ふのであるが、左樣な事は詰らぬ話で、釋迦如來は實際的に嘘を吐いてはいかん、酒を飲んではいかぬと説かれたのである。後には不飲酒戒の講釋をするに、酒を飲みながら話をして、「これは飲若湯だ、酒では無い別だ」といふやうな嘘ばかり云ふ、それは坊さんが全然腐つた後の出來事である。本來佛教はもつと嚴格なものであつて、假令頭斬られても嘘は吐かぬ、如何なる場合に於ても酒は飲まぬといふ釋迦如來の仰しやつた教を守るのは、法に歸依すると云ふ事であつたのである。今日の坊さんのやうに詭理窟をいうて、お經をジヤブ〳〵讀みながら居眠りをして居るといふやうな者は、佛在世には一人も無かつた事であらうと思ふ。左樣な譯であるから法に歸依すると言つても、お釋迦樣を忘れてしまつて、「教はつた教は守るけれども、お釋迦樣は嫌ひぢや」と言ふやうな馬鹿は一人も居らなかつた。やはり佛を敬ふ心に導かれて佛の教訓といふものを信じて居るのである。今の研究、今の文明は、宗教の意味合から非常に遠ざかつて、學問の旺盛の時代、學問が宗教をオツ倒した文明であるが故に、人は構はない、先生は惡口言ひながらでも、其の事柄を習つて來さへすれば宜い、算術なら算術を習ふにしても「一と二と合せたら三ぢや」と云ふ事を覺えさへすれば宜い、「先生ナンて言つたつて何だ、僅か四十圓かそこらの月給で威張つて居やがる」ナンと言ひながら、一と二と合せて三といふ事だけは覺えて來る。斯ういふ風に學問は人と切り

放して行けるが、今日はその事が非常に强く現れて來て、學校ばかりではない、總てに現れて居る。さうして今日は逆に物を考へて、「法華經は眞理だ、他は信じて居るが釋迦は嫌ひだ」といふやうな馬鹿が出來て來たけれどもさういふものは變態である、活ける價値ある威力を信ずる所の宗教に於ては左樣な事は決してあるものでない。故に阿含全體は六念の法が説いてあるけれども、その中心の信仰は釋迦牟尼佛に歸依する事である。

又佛の觀念が後のやうに分裂をしない、佛と言へば釋迦牟尼佛に限つて居る。釋迦牟尼佛は横には無論佛は一つも説かない、西の方に佛が居るとか、東の方に佛が居るとかいふやうな事は、阿含經の中には言つてないことである、唯だ三世にのみ佛を見て居る。即ち前の世に過去七佛といふものが出られた、或は拘留孫佛であるとか、或は拘那含牟尼佛であるとか、迦葉佛といふやうな佛が七人出られて、その次に今釋迦牟尼佛が出られた。釋尊の次には彌勒菩薩が、今度佛に成つて出られるといふ事になつて居るので、時間的には佛があるけれども、横に同時に違つた佛が存在して居ると云ふことは阿含の經典には一つも無いのである。故に阿含經中には阿彌陀さんもお藥師さんも、そんな佛は顔も出さないのである、

であるから阿含の思想から言へば佛の思想は分裂しない、釋尊の教を聽きながら横に阿彌陀様の方に行くとか、お薬師さんの方に行くとか云ふ觀念は少しもない。時間の方に過去の七佛があつても、過去の佛は既に涅槃し給うて今值ひ奉ることは出來ない。彌勒が後に佛に成ると云ふけれども、それは非常に年代が隔つて居ることである、今吾々が仰ぐ所は釋迦牟尼佛あるのみと云ふことになつて居る、それが非常に明白に鮮かに現れて居るのである。今の日本の佛教徒のやうに釋迦教でありながら何處にでも勝手に行くといふやうな風來的のものではない。それは危險性を帶びて居る、今の日本人が段々危險性を帶びて、皇室を戴きながらデモクラシーをやつて色々の事を言ひ出して居るのと同じやうに、終には已れが佛だから釋迦などは頭を叩けと云ふやうな者が出て來たけれども、之は皆な佛教の中に謬つた觀念が發生して、逆路伽耶陀と云つて、逆さまに路を行つた者である。眞に佛教の教の通りに行くならば、阿含の中に頭を入れて信心すれば唯だ釋迦牟尼佛あるのみである。華嚴經に於ても釋迦牟尼佛あるのみである。其處には一點も他に精神の紛れる所は無い、チヤンと紛れないやうに說いてある。華嚴經であれば何が出て來て向うで色々な事をして居つても、皆この端座して居る所の釋迦如來の力に依つてゞあるといふ事を說くのである。であるから「佛力を承けて」といふ事が何處にでも書いてある、華嚴經を御覽なさい、佛力を承けて今普賢菩薩は斯ういふ事を說く、彌勒菩薩は斯ういふ事をすると云ふことになつて居る。どういふ活動をしても、どういふ說法をしても、皆その端坐して御座る所の釋尊の神變の力を以ての故にそれが爲されて居るのである。阿含經を見れば今申す通り、如何なる教も皆な釋尊の御口より出でたるものである。釋迦如來の御口より出ない佛教といふものは一字一點も存せざるものである。それはあり〳〵と分る。どんな愚かな者が見ても阿含經二百卷を次から次へと讀んで行けば、吾々佛教徒の信ずる信仰目標は何處にあるかと言へば、紛らう方無く罪も彼も釋迦牟尼佛に絕對の歸依を捧げることになるのである。釋尊は今新たに信者が出來る時には、直ちに三歸戒といふものをお與へになる、その三歸戒を受けて始めて佛教徒と成るのであるが、先づ「汝は佛に歸依するや否や」と尋ねられる、佛とは誰を指すかと言へば「釋迦牟尼佛のこの佛に歸依するかどうか」と云ふ事を問はれるのである。其處で「世尊に絕對の信親を捧げます」といふ事が佛教徒第一の誓ひである、「あなたの仰しやる事は信ずるけれども、あなたには力が足らないやうに思ひます、」といふやうなことを言つた者は阿含經の中に一つも無い。「力が足らぬと思ふ位ならマア今日は佛教徒とならずに歸つて、能く考へて見い」と釋迦如來は仰しやる。「あなたにはモウ絕對の信親を捧げます」と言うて、始めて「宜しい、然らば信親をして居るこの佛の教ゆる事に背くことはあるまいナ」「あなたの御教には絕對に服從致します」「宜しい、然らば我が教へたる所の弟子達がこの佛教を弘める場合に於て、又我が弟子の言ふ事を用ゆるか」と云ふことを問はれて「あなたがお許しになつて居る正しい坊さんの言ふことならば信じます、但し僞坊主だの誤魔化し坊主は信じませぬ」といふ事を言つて居る。それが即ち三寶歸依といふことで、非常に鮮かに現れて居る。それをやらん限りには佛教信者になれない。所が當時の佛弟子の或は舍利弗、或は迦旃延、或は富樓那等の人達が各地に佛の教を傳へる爲に傳道すると、人々が感心して佛教に歸依するといふ時に、必ずやその信者の方からは「私はあなたがえらい方だと思ふから、あなたに歸依致します」と言つて居る。これは宗教といふものは必ずさうなつて來るので、その教を說いて居る當事者に先づ信親するといふ感情が湧いて來る。富樓那尊者の說法を聽いては、先づ第一富樓那に敬意を拂つて「私はあなたがえらい方だと思ひます、あなたの仰しやる事を感心致しましたから、あなたに歸依致します」といふ精神が動いて來る。さうすると富樓那は「待てヨ」と云ふ、「汝が佛教徒と成らうと思ふならば、この富樓那が歸依して居る所の佛様に汝も亦歸依するが宜しい、自分は同じ佛弟子である、今日からは汝は我が朋友である、我は決して汝の師では無い、汝の師は一人釋迦牟尼世尊である」といふ事を富樓那が云つて居る。それは舍利弗であらうが、迦葉であらうが、各地に傳道して居る所の佛弟子は、教ゆる事みな一つである、皆な「我が歸依する所の釋迦牟尼佛に歸依せよ」といふ事を言つて居る。後の坊主のやうに「どうも釋尊は些と力が足りまい」といふやうな物好きな變手古な事を言つた者は一人も居らぬ。之は餘程頭が妙に捩れて來なければ、釋尊の教を奉戴しながら釋尊にけちを附けやうといふやうな考へは出て來ない。能く考へて御覽なさい、大分廻り廻つた間違ひの狀態に於いてゞないとさう云ふ考へは起つて來ない。故に阿含經には明白に釋尊を絕對の歸依者として居るのであります。

それから次には方等部の諸經であります。之は時間が非常に長い間に渡つてのお經が集めてあるから、樣々のものが寄つて居るけれども、方等部を代表する所の有力なお經は、大

寶積經百二十卷、大集經六十卷、之が先づその代表的のお經である。故に方等部一名寶積部とも云ふ、一切經の目錄を按いて見ると、華嚴部、阿含部、寶積部となつて居る位に、寶積經は即ち方等部を代表する所の經典である、それが百二十卷ある、阿彌陀樣のことや藥師樣のことは、この寶積經中の僅かに一冊に說いてある短かいものである、一方は百二十卷ある、その樣々に說いてある中に、一寸あんな事は出て居るのだ。その意味といふものは大した事ではない、同じ寶積經中に阿彌陀經などに說いてある意味と全然反對の行き方の違つた事は幾らも說いてある。寶積經を全體通じてその思想がどう現れて居るかと言へば、これは無論釋尊の方便應用の偉大なる事を說いて居るのである。方便應用の偉大といふはその對手に依つて適當な方法を取ることで、方等部は四教並說とも言ひ、或は之を逗機といふ、逗機と云ふ言葉は對手に當て嵌まるやうに說くと云ふ事である。其處で對手の者が賢こければ非常に難かしい哲學のやうな話があるから、楞伽經のやうなお經も出て來る。小さな事に囚はれてコチ〳〵やつて居る者に對しては維摩經のやうに一切の執着を打破して、一寸抑へ所の無いやうな超越的な眞理を說く事もある。又そんな哲學などの分らぬ者の爲には、或は阿彌陀經のやうに唯だ阿彌陀の誓願を說いて、お有難いやうに說く所もある。又直ぐその次には、阿彌陀經のやうに彌陀の名前さへ言つたならば宜いといふやうな敎へいかぬと言つて居る所があるので、左樣な事を言ひ居れば宗敎は非常に墮落してしまつて、人が向上する所の精神を失ひ、非常に低い宗敎になるから、彌陀の名前さへ言ふなら何も爲んでも助けてやるといふ樣な間に合せの事はいかぬと云ふ事を諄々と說いてある。それは矛盾するぢやないか」と言ふ人があるが、矛盾する譯である、樣々の人間を引出して來て衆生を濟度するのであるから、熱のある奴には氷で頭を冷やせといふ、冷える奴には炬燵を入れろと云ふ、これは矛盾するに違ひない。病人が樣々あるから手當の方法も違ふ譯である、それが逗機說法と言つて、その偉大なる釋尊の善巧方便の智慧といふものを說明したるものが寶積經である、阿彌陀樣の話などは要するに釋尊が韋提希夫人といふ婦人の座敷牢に入れられて居る者に對して、その心を慰めて苦みを除くべく一時の慰安を與へた、その逗機說法としての釋迦如來の善巧方便の智慧の偉大を說明して居るものである。その善巧方便の末に引つかかつて釋迦を忘れて、「何處までも阿彌陀に縋れ〳〵」といふやうな宗旨を立てるなどと云ふ事は、何と言つても餘程方角の間違つたことである、本多日生が一切經を見て判斷を下すこの判斷の方が實際彼等の識見より數等上ナンである、それだけに佛敎を見る眼識を彼等は持たなかつた、寶積經なら寶積經を見ても、今私が言ふやうな說明をするだけの識見と抱負とを彼等は持つて居らぬ、唯だ阿彌陀經を引摺り出して、これが大變易いから之で押切らうといふやうな事を考へる。それは佛敎を東西の文明の中に於て發揮しやうといふやうな大精神を彼等は持つて居らぬ、唯だ憐れな無智識なる者を如何にして救ふべきかといふ、この優しい一つの感情に促がされ居る。何も知らない者をも何とかして救ひたいといふこの優しい一つの觀念は、彼等に於て確かにあつたであらうけれども、今日の如く東西の思想文明を接觸して、一歩を誤れば西洋文明の爲に東洋文明の全部を破壞せられ、併せて佛敎の如きも葬られんとする場合に方つては、それだけでは事が濟まぬ。併ながら東西の思想界に立つて佛敎の偉大を說明せんとするが如き事は、その時代が彼等をして斯の如き觀念を起さしむることが出來なかつたのである。唯だ內輪喧嘩をして、夫が殺された、息子が殺されたと云ふので、沈の涙に暮して居るやうな日本の內亂の中に起つた宗敎である。今日の日本人の求むべき宗敎は左樣なものではない、少くとも內に、國民の思想を率ゐ、外には世界の文明に對して東洋文明の權威を發揮すべき立場に於て宗敎を求めんければならぬ。それは時代が違ふのである、今に至つて唯だ法然上人がえらい、親鸞上人がえらいと云ふやうな事を言つて居る、さう云ふ思想こそ大いに改造しなければならぬのである。ヤケクソの改造論はいかんけれども、頑迷固陋なる思想はこの秋に於て幸に改造するが宜い。

今私は方等部の諸經に就て見ても、方等部は釋尊の善巧方便の智慧の偉大なる事を感ずるといふより外ないと思ふのである。この一言を御記憶になれば、何が說いてあつても其處に自ら統一があるのである。それは醫者がお前は熱があるから頭を冷やせ「お前は冷えて居るから炬燵を入れろ」「お前は斯ういふ藥を飲め」「此者は藥等は要らない、風呂に入れて綿蒲にしろ」「此者は酒に醉ぱらつて居るから少しの間寢かして置け」といふやうに、その言ふ事は皆な違ふけれども、要するにその病に對して藥を與へる——對症療法として之を與へたる點に於て、唯だ一人偉い者は釋迦牟尼佛のみ殘るのである。說かれた地藏經とか藥師經とか阿彌陀經といふものより、總てのものに對して對機說法を誤らずして說かれた、その無限の善巧方便の偉大なる力を釋尊の上に見るのであ

る。それが方等部の觀方である、法然や親鸞お居つて、之を聽かしてやれば宜かつたけれども不幸にして彼等は先に死んでしまつた。

それから後に般若經といふものが現れて居る、般若經六百卷と言へば大變大きいけれども、之はやはり大體方等部と同じ事が出て居る、般若經の特に異つて居る所は別段さう澤山あるのではない。般若十八空を說く」と言つて居るが、その十八空と云ふやうなこともやはり仁王般若經にも出て居るし、他のお經にも屢〻出て來る事で、それが般若經特有の思想といふものではない、左樣な事が少し詳しく說いてあるに過ぎぬのである。あとは一般佛教の常識的の事が寄せてある。それは竜樹が般若經を講じた『大智度論』を以て御研究になれば、般若經が如何なるものだといふ事は能く分るのである。何も六百卷あつたからと言つて、それで驚くことはない、大抵の事はどのお經にも皆ある事が重複して出て居るに過ぎない。であるから轉讀と言つて、折本のお經をバラ〳〵とやつて、般若心經と云ふ僅か一枚だけのお經を讀んで、後は讀まないでバラ〳〵と引繰り返して、蟲干みたやうなことをして居るけれども、それでも間に合ふ譯ナンである。

其處でその般若經に於ての信仰といふものはどうちやといふことになると、十八空といふのは唯だ色即是空とか、空々寂々とか云ふものではない、十八段の法で空を說いたといふのは、要するに人間の囚はれて居る事を攻擊するのである。であるから又「一切の物は空なり」と思ふやうな所に囚はれれば、今度は「空々」と言つてその「空」を又「空」するのであるから、即ち何も無いといふ考へをも打破るのである。「十八空を說いたから世の中は空だ、何も無いのだ」といふやうな所に落込んで行くと思つたら大變違ふ、あらゆる方面から囚はれたる精神を攻擊して居るのであるから、何も無いといふやうな多くの人が持つて居るやうな考へは一番に打壞されてしまふ。世の中は唯だ金だけだと思ひ、パンだけだと思うて居る今日の勞働運動のやうな觀念も打壞されるのである。左樣な一角にはれて居る迷ひを打破つて、先づ人間の精神を中正不偏のものに戻し、光風霽月といふやうな實に立派な精神に戻し、磨き上げたる精神に戻すのである。さうしてその磨き上げたる精神は何を要求して居るかと云ふと、やはり信仰を要求するものである、又智慧を要求するものであるが、その信仰と言ひ智慧といふものが何處に現れて來るかと言へば、やはり佛法僧の三寶に歸依するといふことが般若經の信仰である、それを除いて般若經の信仰といふものが別にあるものではない。然るに昔から般若經に依つて「佛の頭を叩け、一切經で臀を拭け、坊主などは撲り倒せ」といふやうな事を禪宗坊主でも言ふ者があるけれども、それは大馬鹿者である、左樣な思想に出て來るものではない。「囚はれる勿れ」と言つたからといつて、釋迦如來の有難いと思ふ心までも打破つてしまへといふやうな事を云ふのは間違つて居る。詰らぬ考へを悉く打破つて、清い精神の其處に釋尊に對する信仰を打立てるのである。併しその信仰を打立てると云つても、お釋迦樣を信じて居つたら商賣が繁昌して、ノラクラ〳〵して酒ばかり飲んで居つても錢が儲かるとか、さういふ考へで佛を信じてはいかぬと云ふ事は出て來る。さう云ふ心の間違ひの方は攻擊するけれども、清き精神に於て佛を信ずるといふことは、最後まで之を打破るものではない。お經を有難がるにしても、唯だ字に囚はれて、字の屁理窟ばかり言うてお經の精神を忘れる、その了見が惡いからそれは攻擊するけれども、釋尊の說かれた教そのものの眞意義を破るといふ精神は決してあるものではない。其處を取り違えて「教外別傳、不立文字だから、お經ナンといふものは詰らぬものぢや、己れが佛だから釋迦如來は頭を叩いて宜い」、斯う云ふやうに出て行くのは、餘程導馬鹿が手傳つて居る、左樣なことは宗教にあるべきものではない。般若經を讀んでも己れの頭が惡いとさう云ふやうな事になるのである。吾々が見た般若經には左樣な迷ひに陷るべき點が一つも見えない、寧ろさう云ふ問題が起ると、聽衆が皆な坐を立つて居る、佛は信じないでも宜いといふやうな意味合に聞える說教があつたならば、聽衆の方が承知しない。「この忙がしいのに、こんなに電車が込んで面倒なのに、何しに統一會に參詣しますか、佛も信ずるに足らぬ、教も信ずるに足らん、お釋迦樣の頭を叩れと云ふやうな馬鹿らしい事に、時間を潰して何で來ますか、そんな事なら左樣ナラ……御免蒙る」と云つて、皆が立つて歸らうとする。其處で左樣な間違ひさうな問題の時には、聽衆の方で承知しない、何故に吾々を集めて教を說かれるのであるかと云ふ問題が起るから、「マア待つて呉れ、俺の方の言ひやうが惡い譯ではないけれども、お前の方の聽きやうが惡いのぢや、それはそのお經に囚はれた間違つた觀念を攻擊して居るので、お經を攻擊しはせぬ、佛に對する間違つた觀念を攻擊するので、淨き精神に於て佛を信ずる者は攻擊しはしない。それをする位ならば佛法に於て歸依三寶といふことを說く譯が無いぢやないか、假令般若經に行つた所が、三寶に歸依してならんと云ふやうな事は決して無い」と言はれる。

雖が行つてもその暴が絶度出て來るのである、所が日本佛教に於てはその暴お無くなつてしまつて、言ふ奴も思ひ切つて、亂暴な事を言ふし、聽く方も成る程さうだといふ樣な事になつた。隨分昔の武士などには無宗教的の者があつたから一實は僕等も坊主の講釋は聽くけれども、釋迦等は素々嫌ひだ、然し飛離れた事を言ふのが面白いから來居つた、今夜の話は氣に入つた、お經で膏を拭け、面白い」と云ふやうな工合で、聽衆も說く方もチャンと無宗教的觀念が一致するものであるから、左樣な議論が變つたけれども、釋尊の時代には左樣なトッ拍子も無い考へを持つて居る者は一人も無い、却つて聽く者の方から、今言はれるやうな意味に成つて行つたならば、吾が信仰を如何にするかと言つて、直ぐ帰ぬるから、その問題は約盤に解決がついて行くのである。故に般若經に於ても、釋尊に對する信仰といふものは、美くしく現れて居るのであります。私は他日般若經を詳細に紹介して、私の言ふ所が一點も間違ひないといふ事を天下に知らしめたいと思うて居る。（未完）

日蓮主義畸人傳

五、天人之麗陽

本名は安道有田師、知る人に取つては頗る有名であり、知らぬ人の爲には全く無名である。佛教に就ては其の熱、殆んど常軌を逸する程度であり、ネブカ調子で天下を論じ、國家を論じ、佛教を說き、基督教を說き、婆羅門教に觸れ、回々教に觸れ、モルモン教に及び、或は社會問題、勞働問題から、人生問題、婦人問題に至る迄、滔々として說き去り辯じ來りて、長廣舌を振ふこと二時間三時間に至る。若し夫れ動もすれば悲哀極めて少數に、而も夜の更くる僅に悉極りて夢背の間に遊ぶが如き下根下機に對しても、尚ほ說くことを憂めざるが如きは、寧ろ君の熱を實證するものであり、又或は時として論旨餘りに廣汎多岐に亘りて肝心の中心を逸脫し、或は論議熱を帶び來ると共に說線に說線を重ね、すつかり時間空間を超越して、歸りの終電車に乘り遲れるお如きは、寧ろ君の美點に數ふべきである。

六、高木冶地君

うぢいでらの住職高木冶地君も慥かに畸人傳中の一人である。少し顯は惡いお、狂熱的の信仰は飛るゝもの悉くを灼き盡さうとする。或る日新しい芝居を見に有樂座の木戸口を跨いだ、主我的の作物は一幕毎に其の特徴を開展する、ヒステリックに思想の惡化を憂へつゝあつた冶地君は、俄に色を變じて警視廳に駆けつけた。「刺激的の劇なり」と。ヒステリックの警視廳員は非常召集を行つて、冶地君を先頭に作者に面會を求めた。君のように深刻に私の作物を見て矣れた事を感謝します、」と握手を求められて赤くなつた冶地君は、一生涯の失策だと云つて居るお、かゝる失策を度々仕向來す處が君の身上だらうと思ふ。

聖經

佛教徒の道念

本多日生

佛、阿難ニ告ゲタマハク、吾レ人ニ食ラズ、人モ亦我ニ食ラズ、而シテ吾レ道ヲ以テ一切ヲ慈念シ度說セシメント欲ス、夫レ人、道ノ爲ニスルハ、一世ノ苦ノミ、道ノ爲ニセザル者ハ其苦彌々長シ、人ノ沐浴スルガ如キ但外ヲ淨ムベクモ心垢ハ除カズ、應眞ヲ得タル者ハ衆惡都テ除コル、凡ソ人ハ志心アリ、道人ノ心ハ一ニシテ石ノ地ニアルガ如シ日炙スレドモ消ヘズ、雨流スレドモ釋ケズ、風吹スレドモ動カズ、其ノ凡俗ヲ出デ、至道ヲ成ズルヲ得、心意已ニ冷カニシテ復熱嫉無シ、譬ヘバ蓮華ノ汗泥ヨリ出デ、根葉常ニ冷カニシテ塵水ノ著カザルガ如シ、沙門自ラ念フ、父母ノ子ヲ養フハ恩一世ニ極マル、佛ハ天下ヲ開イテ人ヲシテ道ヲ得セシメタマフト。（佛國解脫志阿鞞經、正大藏第十四卷ノ二）

この一節は佛の思念を明し、又道の爲めに盡すの德を擧げ而して佛教徒の道念は確固不拔なるを明し、更に佛德の偉大なるを感謝した經文である。

佛は阿難に對して更に仰せられるには、我れ釋迦牟尼は人に對して求むる所がない、普通人のやうに權勢名利を貪ることはない、隨つて又世人も我れ釋迦牟尼に對して穢れた所の利益、穢れた所の權利を要求しては來ない、淨い道を求むるが爲めには我が許に皆集まるけれども、通常の者が勢力を得て居るのは即ち權勢利祿の爲めに人が集まるのである。我はさう云ふ關係を以て人と結んでは居らない、唯だ自分は淨き道を以て一切を惡み、さうしてそれを救はうと思ふのである即ち精神的の救濟を理想して働いて居る者である。世人は宗教なり道德なりの教に依つて生活することは困難のやうに考へるけれども、それは唯だ一世に於ての苦みといふか、自分の卑しき慾望を節制するのであるから辛いやうにも思ふけれども、それは一時である、若しも今日の卑しき慾望の促すが

僅にして暮したならば、幸福のやうに思ふけれども、其處に惡業を犯すが故に、道の爲めにせざる左樣な頑嚚の生活は、その苦みが永遠を稱ひするのである。佛教の教に依つて生活する者は、一時慾望を節制するやうであるけれども、永遠の幸福が來るのである。丁度世人は身體を水に依つて洗つた所が、それは肉體の外を汚して居る物を洗ひ落すことは出來るけれども、心の垢は一點も除く事は出來ないであらう。所が應眞即ち如來の教に依つて眞實の語を得て居る者は、總ての罪惡を洗い落して、清淨なる德の人と成ることが出來る。それであるから少しは辛い事があつても、辛抱して佛教の修行をしなければならぬ、凡そ人は志といふものがあつて始めて人格が向上するのである、理想も無く志も無い者には人格は完成し無い、而して佛弟子として道に志して居る者は、その心は統一されて居つて、決して樣々な外部の事に依つて動かされはしない、自分の打立てたる志の理想、信念に導かれて一切の活動を起すのであるから、精神は統一されて居る。さうしてそれが恰も大盤石の大地に處するが如き有樣であつて動搖を受けない、他から打破られない、丁度大きな石は日が炒つけるやうに照つたからと言つても、それで石が消えてしまひはしない、雨が如何程降つてもそれで溶けてしまひはしない、暴風が吹いたからと言つてもそれに動かされない、確固不拔の信念に立つて居るものである。隨つてその志の結果は凡俗の生活、物質萬能の如き穢れたる生活よりは一頭地を拔いて、さうしてこの上も無き道に依つて人格を作ることが出來る、隨つて心は下らない事に對しては少しも熱中しないその事に對しては「冷かにして復熱絡無し」で、普通人のやうに劣等なる慾望に熱中して、眼が眩むやうなことは決してない、恰も蓮華が泥の中から出て淨らかなる花を開いて、少しも汚れを受けないやうなものである。其處で斯の如き結果を得るといふものは、唯だ偏へに佛の恩である、佛弟子の志は無論父母の恩を大切にするといふ事は釋尊の御教である。小さき恩すら忘れてはならぬ、況してや大恩をやと言つて、父母の大恩を大切にするは論の無いこと、その深き父母の恩よりも更に佛の御恩が優る、それは父母が子を養うて呉れるのは一世のことであるけれども、佛は天下の人——一人二人の子供ではない、一切衆生の總ての人をして道を得せしめ、その結果は一世の幸福ではなく、永遠の生命までも救はれるのである。廣くは一切の衆生に及び、長くは永遠の生命にまで救ひを與へ給ふのであるから、父母の恩は無論尊いけれども、佛の恩は更に尊いと云ふ觀念が佛弟子の頭に動いて來る次第である。これは何も差支ないことで、日本の國民道德論者は斯樣な事を言ふと、「佛が有難いと云つては父母を忘れるやうになる」といふやうなことを言ふ人もある。左樣な風にしてやつて行つて遂に宗教を捨てた結果は、國民道德の根柢までが動搖する樣な事になつて來たのである、恰も斯の如き誤つた議論を今後も許して置くことは出來ない譯で、佛教を見て直に之を嘲るやうなことになつてしまつたのは、それはさう云ふ人が間違つて居るので、斯く佛教の信念が打ち立てられた時、一層父母の恩を思ふ觀念も共に發達して來る次第であります。日蓮聖人の如きはその實例であつて、釋尊を思ふ心に依つて命まで捨てる人が、又父母の恩を思ふことも、非常に大切であつて、六十餘になつて身延の山に詣つても、涙を流して父母の恩に感激して居るのである。その妙味は平凡なる學者や教育者や政治家の會得の外である。

教義

日蓮聖人教義綱要

「第四十」

井村日咸

第九章　得益

第四節　現世の利益（二）

我々の信ずる現世の利益は、斯樣に歡喜法悅の境地に安住せるより、任運に身心の暢達を來し、息災延命の現益が現はれ來るものでなければならぬ、然る處此現世の利益に就ては往々にして迷信化して來ることに甚大の注意を拂はねばならぬ、現今の我國の狀態では、洽々として迷信に走せて居るのであるが、此は大に慨嘆すべき事柄であります、此迷信は世を害し人を毒するの甚しきものであつて、世運の進歩を阻害すること大なるものである、正しき信仰に住するものは此迷信を擊退することに一臂の力を貸さねばならぬ。

一體迷信とは如何いふものを指して迷信と云ふかと云ふと科學知識を否定し、又は常識を以て眞實にあらずと定められてあることに反對する樣な思想は迷信であると言はねばならぬ、大本教が此世界は龍の樣な形で一日何萬里と云ふものを駆け廻ると云ふ樣なことを言ふが、今日の知識に於て地球は圓體で其自轉に依つて、晝夜の別を生ずることは一般に信ぜられて居る處である、それを否定する樣な大本教の說は迷信であると言はねばならぬ、今日は氣合術とか大靈道とか大本教とか云ふものが出て、釋迦も孔子も知らぬ靈術を行ふ抔と言ひ觸らして、愚にも付かぬ事をして多くの人を迷はして居る一寸普通の人の出來ぬ樣な事をすると、多數のものがヤレ不思議だ靈妙だ抔と一杯喰はされるのであるが、此等は心理現象にある一種の變態現象であつて、敢て不思議と稱するに足らぬものである、我國民が一般に心理現象若くは精神界の方面に知識が淺くて何等の研究をもして居らぬから、すぐ騙されるのである、少し心理學なり宗教方面の知識さへあるならばソンナ事に騙かれるものでは無いのである。

要するに迷信に入るのは一面には宗教的自覺の無い爲と、一面には精神的方面の研究が不充分なる結果に外ならぬのである、宗教的自覺の無い爲めに迷信に走るのは、人々の生命の不安からであるが、吾々が永遠の生存を欲求することは、吾人人類のみならず百般のものゝ最も强い本能として顯る處である、吾々の煩悩は生存の欲求に對しては最大なるものである、吾人が其生存を脅かさるゝに於てはそこに非常なる驚愕を感ずるのである、眞の宗教は其等の不安に對して安心立命を與へて、此苦悩を脫せしめんとして起つたものであるが、人々は此眞の安心立命を求めんとは仕ないで唯徒らに煩悩するのみである、自己の將來に對する研究が不充分であるが爲めに、一朝病魔に襲はれたとなると直に生命に對する脅威を感ずる、所謂溺れんとするものは藁をも握むと云ふ諺の如く、天理樣がお助け下さるる、ソラ行け、氣合術で癒る、ソラ行ケと云ふ樣な事になる、大本教は神諭抔と稱して勿體つけ、大正四年には火の雨が降るの、太正十年には世界戰爭が起つて東京は元の武藏野に爲るのと、無暗に人心を脅かす樣な事を言觸して人々をして迷信に走らしむる樣に仕向ける、ソースルト輕燥者はソレ荷物を方付て綾部へ引越せと云ふ樣な評になる、此等は全く人生に對する無自覺より起つたものであると言はねばならぬ、佛陀は吾人をして人生に對する自覺を起さしめ、其心眼を醒さしめんと御骨折下されて居ることは、法華經寶喩品の中に委細に說かれてある、此事は本編第六章人身觀の下で委しく申上げてあるから再び申上げぬが、人生に對する適當なる理解を得られたならば徒らに生を欲し死を厭ふの愚なることを了解せらるゝのである、生死を超脫して安立處を得たので無くては人生の不安は徹底的に拭去ることは出來ない、彼等迷信に依る利益と稱するものは縱令一時的に其效驗ありとするも、其不安を徹底して拭去つて居るのでないから、時を經て再び同し樣な不安に襲はるゝ、繰返し〳〵幾度も煩悩を重ぬる樣になる、そんな一時的の救濟は佛陀の救濟ではない。

次に精神方面の研究に不充分な處から迷信に陷るのは、人は本來の性質として、神祕に憧憬るゝの傾向を持つて居る、自己の力の足らざるを知りて何等か偉大の靈力に接觸せんと志ざすのは自然の要求である、そこで千里眼や天眼通抔云ふものが出ると、ソラ行ケ〳〵でお百度を踏む事になる、大本教で行る鎭魂歸神の法と云ふが如き一寸聞くと大變不思議な事で、神樣が天下りて騙れて來る抔と考へるけれども、是は昔の人が大水や大風を水神や風神の仕事と信じた樣なもので其方面に知識が足りないから甚だ不思議の樣に思ふ丈の事である、現今の人が水や風が神樣の仕業で無い事は誰でも承知して居る事である、教育が普及したからである、然るに心靈界の方面は未だ一般に何等の知識が與へられて居らんから、少し見慣ない事聞き慣ない事が出て來ると、或は驚き或は怖れて、之は神業であらう、神樣が顯れてせらるゝ事であらう抔と騷ぎ廻るのである、彼大本教の御筆先の神諭抔言ふことも心理學上から見たならば甚だ平凡な事である、唯普通の人格變換に過ぎぬ、心理學者はソーユウ實例は澤山に知つて居る事であり、又實驗上何人にも任意に行ふことの出來る事抔である、學問上の言葉では心理の變態現象と言ふて居るのである、佛法には吾人の心なるものを八つに分けて、前の六識は吾人の普通に認識して居る眼、耳、鼻、舌、身、意の六であるが、一般人は此六識の働作丈しか知らぬ、處が吾人には更に第七末那識（執識と翻譯す）第八阿賴耶識（藏識と翻す）の二が、其奥底に存在して居る、普通の場合には此の二は表に顯れぬが、前の六識が活動を停止した時には例表に顯るる事がある、今の催眠術抔に於て二重人格と稱し、心理學に於て人格變換と稱するのは、表に顯れて居る前六識と、常に顯れて居らない第七八識の作用との變化であるのである、此心の事を委しく論じた「唯識論」と云ふ書物抔には、吾人の心靈の作用の玄妙不思議なるものであることが說かれてあるが、現今の人は其方面に對して何等の知識をも有して居

らぬから、他の方面では相當の學識あり理解ある堂々たる紳士淑女が、お題目を信じたり、鎮魂歸神の法で神樣が出て來る抔と信ずる樣な譯合であります、吾人は肉體と精神と兩方を持つて居るのであるから、肉體の方面の研究に志すと同時に心靈方面の知識を一般に普及せしむることが必要な事であり教育の效果を充全ならしむるには、但に物質上の知識丈では益に立たぬ事をお考を願ひたいのであります。

以上迷信の入るのは人生の自覺を缺けると、心靈方面の研究を缺けるに基くものであることを申上ましたが、信仰の形式から見ると正信と迷信との區別は分つことは困難ではあるが、其信仰の動機に於て、人生の自覺に基いて起つた信仰か覺醒なき信仰かに依つて分れて來るのである、法華經提婆品の中に釋迦世尊が過去求法の因緣を說かれた其中に、

普く諸の衆生の爲に大法を勤求して、亦己が身及び五欲の樂の爲にせず。　（縮法二、七、七）。

と說かれたが、衆生の爲めに大法を求め、自己の爲め及び五欲の樂の爲に法を求めなかつたとは、即ち迷信と正信との分れ路である、自己の我欲を滿足せしめ、小なる我を愛せんとして起す信仰は凡て是れ迷信である、小我を捨て一切衆生の爲めに求むる信念是れ正信である、此正信に住して滿足法悅の生活に入るもの是れ眞の現世の利益である、日蓮聖人は佐渡雪中一間四面の茅屋に住して而も、

日本國に第一に富める者は日蓮なるべし。（縮道八〇三）

と仰せられた、物質には貧しくとも、精神的に富めるが故に斯く仰せられた、此精神的滿足の生活を爲すことを得るものは此が眞實の現世の利益と稱するものである、現今の日蓮門下の中には盛んに迷信を鼓吹して大本教や天理教に一歩を讓らざるものがあるが、此等は城者破城の大逆罪を犯すものと云ふべきである、速に懺悔すべきであらう。

庚申十月十五日尾張一宮講演歸途電車中所得

櫻溪倫史

『烟蒼半暮里、月白點燈家、書裡電車走、胸中抱佛陀、三千是一念、一念是蓮華、法悅向華嚴、賦詩奉釋迦』

何處子何處

同

『何處子何處、出家復出家、或吟尼港月、或賞太湖花、我如失至寶、賦詩問佛陀、佛陀嘿不應、何處子何處』

雜錄

私の婦人觀

安西千賀夫

所が我國の婦人は其の話す事が全くつまらない事ばかりであつて、井戸側會議的の事か、左なくば衣服の品定め、殿方の惡口し位に終るのであります。而も之が無教育の長屋に住んで居る樣な人達でありまするならば兎も角、折角高等の教育を受けた婦人たるものが斯樣の事では身自らを輕蔑するものと思ふのであります。能く日本では、妻の人格を認めぬとか、妻に相談せぬとか申す事を聞く樣でありますが、若しも右申述べた樣な有樣でありとしまするならば、之は妻に話さぬのが惡いのでありませうか、又話を聞く丈の修養を怠つた方が誤りなのでありませうか、男子が此の世の中に立つて仕事をして居りまする以上は、種々思に惱む事が多いので、話をせぬ處ではない、何かよい智惠を借り度と思ふことや、胸中の鬱を散する爲によく聞いて貰い度と思ふことは度々あるのであります。併し前述しました樣に何分にも井戸側會議的の事とは題材が異つて居りまするので、話しても趣味も起らず、又了解も充分に行き渡ぬる樣なものでありとしますれば、話し度とも話が出來ないのであります。此の點に於て私は米國婦人の樣に男子を指導して欲しいと思ふのであります。若しも夫れ婦人が深く自ら省みて教養に力めましたならば、玉は自ら光を發するが如く、婦人の地位は充分に高められ、眞に男子の尊敬を受くる樣になる事と思ふのであります。

次に男子に對する觀察が今少し眞面目であつて欲しいと思ふのであります、之は主として未婚の御婦人に對して申上げるのでありますが、西洋では男女の交際が日本よりは自由であること、又自ら其の配遇を選擇する責任あることを十二分に了解して居る等の故でもありませうか、男子と云ふものに

付て充分の理解が出來て居る樣に思ふのであります。中々しつかりしたもので、處女の貞節に付ては十二分の信用が置かれて居ります。畢竟する所之も本教養の結果に落ちるのでありませう、此の點に關し紅葉山人の著書金色夜叉の中に斯う云ふ條があります、宮に捨てられた貫一と、貫一の救ふた藝者、(夫の爲に命を捨てんとした)との間に、男と女とは一體どちらが情合が細いかと云ふことに付て問答がある、藝者の答として女の方が濃いが、元來女の惚れ方に三つある、見惚れ、氣惚れ、底惚で、見惚と云ふのは一寸見た處で惚れ込んで仕舞ふもの、氣惚と云ふのは樣子が良いとか、氣合が嬉いとか云ふことに惚れ込むもの、底惚は社の中から惚れ込んで仕舞ふことで、曲りなりにも意見がつき、相手方の人物を充分見拔いて仕舞ふてから後の事で、斯ふなれば減多に氣の變ることはないと云ふて居りますが、果して斯樣な惚れ方があるか否かは知りませぬが、要するに御婦人の男子御鑑別の御見識は今少し眞面目であつて欲しいと思ひます。新渡戸博士の著された「婦人にすゝめて」と云ふ本の中に斯う云ふことが書いてある、今日女子の理想とする男子は御昔風の優男、色の蒼白い骨格の纖弱なびよろ〳〵したにやけ男で、光源氏だとか業平だとか、白井權八とか云ふ樣な手合である。そこで剛健朴訥眞摯な男らしい男は却て遠ざけられて、柔弱、侫佞な小才子が重ばれる傾がある云々と、是等は教養のない婦人に限るのでありませうか、今日青年男子の服裝や其の身作り等から觀て、どうも當つて居る節があるのではないかと思ひます。斯樣な有樣では國家の前途を危ましるのみならず、御婦人方でも御幸福な生涯を御送りになることは出來ないのでありまするから、いやでも婦人の男性觀に誤りのない樣にしなければならぬ、吳れ〳〵も大丈夫の本領は何處であると云ふ點に御眼を注ぐことを御忘になつてはなりませぬ。

更に申上げる事は體格の問題であります、一體此の黃色人種は男子たると女子たるとを問はず、其の體格白人と日を同ふして語ることが出來ませぬが、殊に婦人の體格は劣等であると思ひます。此の點に關しては男子も充分責任を有たねばならぬ、容姿細膩など云ふ纖弱な女を美人と見て來た結果もありませう。然るに近頃は學校でも體育が非常に盛になり、見事な體格を具へて居られる方々も少くありませぬが、未だ充分に行かぬ、古き諺にもありまするが如く、健康の精神は健康の身體に宿るので、其學校を出でられまして後たると否とを問はず、御健康上には十二分の御注意を御拂になつて、第二の國民を健全に御產みになることは勿論、常ににこ〳〵した笑顏を夫に見せて頂き度ものであります。

最後に之は西洋婦人に比べた話ではありませぬが、私は日本婦人に御註文するのは、何卒して賢み甲斐のある婦人になつて欲しい、妻となつては賢み甲斐のある妻、母として賢み甲斐のある母、又令嬢として賢み甲斐のある令嬢、即ち彼の人に賴んで置けばもう間違はない、彼の人ならば必ず仕遂げて吳れると云ふ十二分に信賴のある婦人を要求するのでありますが、どうも此の點に於て遺憾なことが多くないかと思ふ併し此の賢み甲斐のある婦人になると云ふことは實は中々容易ならぬ事で、徒に美を追ふて走る樣な輕佻浮薄な思想や、享樂主義の人生觀では此の賢み甲斐のある婦人になることは到底六ケ敷い、眞劍と徹底、飽く迄責任を重ずる婦人に於て始めて此の賢み甲斐が出來るのであります。

今や社會は益複雜となり、生存競爭は益激烈となつて、一家の名譽を維持し、子供を教育して行くと云ふ事は實に容易ならぬ事で、昔の樣に婦人が玩弄物であつたり、御人形であつたりした時代は疾に過ぎ去つて居りますので、僅かばかりの月給では餘程主婦がしつかりしないと家が立て行かない男子は偏に賢み甲斐ある女、尊敬すべき一家の主宰者を要求して居るのであります。佛教では婦人の缺點を愛慾性、性淫性、判斷力の缺乏、國家觀念の微弱と指摘して居りまするが、私は彼の大藏經の月上女經中にありまする月上女の如く、我身を見よ眞金の火色を帶びたるが如しと云ふ强き確信のある又責任のある處水火も辟せざる所の剛健なる賢み甲斐のある婦人を望んで已まぬのであります。要するに私は婦人の天職は家庭的であつて、子を產み、子を育て、夫に依り、夫を通し、子に依り、子を通じて其の思想を行ひ、家庭を善化し、社會を德化するにありと信じまするもので、此前提の下に我邦の婦人に望み度事は教養の高からんこと、健康ならんこと、賢み甲斐のある婦人たらんことであります。(完)

記事

各地統一團支部の秋季大會

天高く馬肥ゆるの秋は、武を錬るに好く、想を錬るに好く軍戰に適し、思想戰に適す矣。茲に我統一團各地支部は一齊に立ちて、秋季大會を催ふし、日蓮主義宣傳の威力を天下に

示さんとす、豈に徒然ならんや。左に要項を摘記せん。

△**名古屋支部大會**　十月十六日午後六時より縣會議事堂に於て日蓮主義大講演會を開く、謹嚴にして熱誠なる聽衆二千有餘、山内櫻溪居士の開會の辭に次で左記講演あり。

法華經の眞價　本多總裁貌下
思想問題と日蓮主義　野澤陸軍少將

△**一宮分會大會**　同十七日午後一時より尾西一宮町歌舞伎座に於て思想問題講演會を開く、聽衆約二千名、會場立錐の地なし。

時代と宗教　本多總裁貌下
思想問題と日蓮主義　野澤陸軍少將
物質より精神へ　國友文學士
思想界の勤王論　山内櫻溪居士

△**枇杷島分會大會**　同十八日午後一時より枇杷島劇場に於て思想問題講演會を開く、聽衆滿場。

思想問題の針路と歸趣　本多總裁貌下
思想問題解決の鍵　野澤陸軍少將
精神修養の意義　國友支部長

△**豐橋分團發會式並大講演會**　十月十三日豐橋市妙圓寺に於て分團創立の式典を擧げ、次で同十五日本多總裁貌下及び野澤陸軍少將を迎へて、同市武德殿に於て思想問題講演會を開けり。聽衆約一千名。

法華經の眞價　本多總裁貌下
思想問題と日蓮主義　野澤陸軍少將

△**大阪支部大會**　十月二十二日午後七時より天王寺公會堂に於て支部秋季大會を開く、聽衆滿堂、其數約一千五百名。

思想問題と日蓮主義　本多大僧正貌下
思想問題解決の鍵　野澤陸軍少將

△**神戸支部大會**　十月廿三日午後六時より湊川勸業館樓上に於て秋季大會を開く、開會前聽衆既に二千、流石に廣き場内立錐の餘地なし。熊井特命布教師の開會宣言に次で講演に移る。

思想問題と日蓮主義　本多日生貌下
思想問題に對する日蓮主義の權威　野澤悌吾閣下

翌二十四日、神戸支部團員の結團式を兼ねて茶話會を勸業館樓上に開く。午後二時開會、式は先づ修法に初まる、本多貌下を大導師に、會場正面に安置せる大本尊の寶前に一同立正安國の熱禱を捧げ、次で本多貌下の法話、統一團の名稱、組織、事業と及び團員としての希望に關する訓示あり。團員代表三崎稅務署長の謝辭の後餘興に移り、一同法悅裡に午後五時半散會す。左に佐藤海軍中將の祝辭を掲ぐ。

祝辭

世界の大戰亂は酷く人心の動搖を惹起し、邪說妖論時を得て物爽し、殆んど世界を席卷せんとするの嫌あり、而も其の行ふところは現在の秩序を顚覆し、民衆の力を以て萬事を料理せんとするにあり、其の歸する處衆惡事を用ひ、相率て那落に墜落せんとするに至る、是れ最も憐むべきことなり、而して彼等はこれを察せず、一時人類の幸福を謀願し、道義を破壞するも尙且辭せずと放言するものあり、而も其の唱ふ處一として己の榮譽を忘れて其の權利をのみ主張せんとするにあらざるなく、其の弊の起く處落々として測るべからざるものあり。

世界の大勢如斯にして奔騰せば、爭鬪相繼いで底止するところなく溫靜なる社會を作りて人類の幸福を高めんとするお如きは、百年河淸を俟つお如くならん矣。

眞に憂ふべきなり、是時に方り慈悲報恩の大道を體現する我日本國民は、彌々國體の精華を發揚し、益々我國風を振起して、自ら模範となり、刀杖瓦石の逼を辭せず、等を傳へて人心を覺醒し、其の動搖を鎭め、東亞眞來に於ける旣往の思想を改造して慈恩の大本に導き、靈々たる和氣の裡に人類の幸福を謳むるに努めざるべからず、是れ實に我等日本國民の天職にして又千歲不磨の天業なり。

我統一團は聖者日蓮の敎を奉じ、立正安國の大義を樹て、此天職を全ふせんとするもの、爲ざ奮躍して長業に進まざるべけんや。

嗚乎仁者にして而して後必ず勇あり、聖者日蓮の渾身は慈悲の一語に成れり、此慈悲あり、而して後彼の如く剛健に、彼の如く勇猛なり、統一團の勇士亦必ず然るべきなり、茲に秋季大會を行はるるに際し聊か所感を述べて祝詞に代ふ。

大正九年十月廿三日　海軍中將佐藤鐵太郎

法華經要文講義

△十月十七、十八日、名古屋市常德寺に於て、聽衆約八百名。△同十九日、四日市々圖書館に於て、聽衆約二百名△同二十日、二十一日、京都市妙滿寺に於て、聽衆約三百名△同廿四日、神戸市勸業館樓上に於て、聽衆約一千名△同二十六、二十七日、大阪市蓮成寺に於て、聽衆約五百名。

監督布教日誌

（隨行員記）

國友監督布教師の一行は秋季思想運動の別働隊として、近畿中國各地方を巡敎せり。

△十月十一日大阪市堂閣寺に於て。京藤山主の開會の辭に次で左の講演あり。

信は寶藏の第一法　金光布教師
物質より精神へ　國友監督布教師

△同十二日京都市妙滿寺に於て宗祖上人御會式法要後講演。

清信の士女約二百名。

信仰に安住せよ　國友監督布教師

△同二十二日岡山縣和氣町小學校講堂に於て同信會及婦人會

主催の下に講演會開催。聽衆三百。

國民の自覺と宗教の信仰　國友文學士

△同二十四日美作津山町弘通所に於て講演、同地三十年振りの大祭典にて全町を擧げて混亂騷擾の巷と化せしに關らず、靜に道を聽く清衆約八十。

文化生活　能仁一十師

現代思想と方便品　原田布教師

感激と信仰　國友日斌僧正

△同二十五日美作英田郡士居村小學校の講堂に於て思想講演會、聽衆二百、山間の僻地には珍らしき盛會なり。

國力と吾人の生活　原田日勇師

國民覺醒の秋　國友監督布教師

昨津山町に於ける國友僧正の講演を聽き、信仰なき者の斷末魔の苦しみを調へられ、深刻なる僧正の熱辯に胸を刺されて、微背眠り得ざりし求法の人高木某氏あり。（過刻教化の主任高木日靖師の令兄）隙路八里を追ふて土居村に來り、前後一時間半に亘る講演の席上、頭を垂れ顏色紅潮して片言隻句聽き漏さじと力めつゝありしが、夜僧正の宿舍本典寺に來り、更くるまで疑を陳じ、入信の道を求む。彼はあくまで理性に偏し其の口をついて出づる處、言々悉く理論なり、而して餘りに理屈つぽきが爲に、宿緣深き法華經の家に生れて未だ信仰に入る能はず、實父臨終の際に俘り祕信の兄弟親族に迫られて尙題目を唱ふる能はず、而も必死に信仰を求めて日夜に煩悶せるなり。初め靜に調へつゝありし僧正の言辭はやがて熱を帶び來りぬ、問ふ所頭々深刻にして、答ふる所彌々簡明に、終に僧正は唯ひたすらに唱題せよと迫りて夫の舌端火花散る。かくて高木君は本典寺に宿泊を強要され、朝の勤經に强て同伴されて、僧正監視の下に本尊の御寶前に端座す。靜かに讀誦する自我偈一品を終りて、題目に移るや罪障深き理屈の人は口籠りつゝありしがやがて聞え初めたり、迦陵頻伽にも比べつべき南無妙法蓮華經の聲。勤經終りて後、「讀經中合掌して居つた兩方の手が折れそうでありました」と信仰に入りし折の實感を高木君は悅びに充ち滿ちて語りぬ。

△同廿六日豊勝田郡吉ケ原本經寺に於て、聽衆約八十。

强き國强き人　能仁一十師

四法成就　原田日勇師

懺悔より信仰へ　國友文學士

△同日夜赤穗郡草生久成寺に於て、聽衆約三百五十。會場に滿ち、溢れて屋外に充つ。同地未曾有の盛況也、蓋し時代の進展して日蓮主義勃興の機運、はかゝる山間僻遠の地迄も漲れるものか。

仁俠の精神と日蓮主義　能仁一十師

法華經の行者　原田布教師

信仰より法悅へ　國友監督布教師

此夜各講師の辯論は何れも水際立ちて鮮かなりき、善き聽衆は善き講演を導き、盛なる會合は旺なる辯論を生む、先づ原田布教師の口をついて出る諧謔に、農村の人の求法の耳は開かれ、次で國友僧正が靜かに古への高僧の事蹟を說き、信仰の人の功勳を述べ來るや、滿座肅として水を打ちしが如く至る所に嗚咽の聲を聞く。

△同廿七日播磨印南郡志方村妙信寺に於て、

今後の宗教　吉永日洋師

法悅より精進へ　國友文學士

各地の思想戰

△**京都地方**　△十月二日、妙滿寺に於て護正會、「本宗綱要講義」萩原僧正△同八日、本正寺に於て二樂會、「信は是れ寶藏の第一法」金光布教師。「生殺與奪は顯本にあり」萩原僧正△十六日、法光院に於て妙光婦人會、「開顯統一の理想」、金光孝碩師△廿四日、岡崎公會堂に於て龍口法難紀念講演會、聽衆約八百五十、「思想問題と日蓮主義」野澤少將。「立正安國論を拜讀して」萩原本山部長△同六日、十一日、顯本顯兒會△同十一日、大和國郡山町常光寺に於て、聽衆七十名、「宇宙第一の寶珠」金光布教師。

△**大阪地方**　十月十三日、蓮成寺に於て例會講演會、聽衆百餘名「法華經の心髓」、上田山主。「孝は法華經より出ず」京藤義應師△同十二日、堂國寺に於て龍口法難紀念講演會、聽衆二百、「念佛尼港製」、京藤山主。「多邊雜信」、上田智量師。

△**明石地方**　十月四日、顯樂寺に於て橘香會例會、「生活の根底に宗教を」、川崎英顯師△同五日、三輪市長宅に於て、「法華經講義」、川崎英顯師△同十二日明石郡大久保町に於て招魂祭、聽衆三百五十、「現代思潮と國民の自覺」、川崎布教師△同十七日、現役兵者の講話、「其本を養へ」、川崎英顯師。

△廿五日、明石市公會堂に於て日蓮主義大講演會を開く、聽衆七百餘。

青年諸君に告ぐ　三輪篤太郎氏

國難來と日蓮主義　本多日生貌下

△**東海地方**　△十月十二日、豊橋市妙顯寺に於て宗風會式法要後少年會並婦人會、參聽者滿堂。「お御廟」、大竹直治氏。「日蓮主義より觀たる婦人」、濱井文學士△同廿三日、東巷田原町當行寺に於て龍口法難會並に講演會、「國力增進の第一義」野中通玄師。「龍口法難に就て」飯田報公園長△十一月一日。四日市に於て安樂寺建設起工式を擧行す△同九日、一宮町平松氏宅に於て、聽衆二百名。「勇氣の徹底は信仰の正確に依る」山內機溪師。

△**淡路地方**　十月三日、淡路津名郡郡家村婦人會、聽衆七百名、「修養の第一義」、中川文學士△同日、郡家村公會堂に於て日蓮主義講演會聽衆滿堂、「日蓮主義の梗概」中川文學士△同四日、州本教育會特別講演「社會改造の問題に就て」中川日夫師△同日、州本婦人會秋季大會州本小學校講堂に於て、來聽者七百名、「女の心」、中川日夫師△五日、州本柳女學校に於て「美の教」、中川文學士。△同日、州本高等女學校に於て「人と教」中川文學士。

△**姬路地方**　九月二十日、例月の日蓮主義公開講演を妙立寺に開く「國民道德と人道」、矢部事正師。「人生と道德と宗教と」、吉永日洋師。「佐渡の日蓮上人」中川日夫師△同日、宍粟郡當野村婦人會發會式「婦人の任務」、中川文學士△同廿九日、飾磨郡津田村戶主會秋季大會

「國家青年の活動」、中川文學士△十月九日、第十師團兵器部工女講話「人格修養の根本義」、中川文學士△同十一日、立善大人會例會、「信仰生活」、小林長次氏。「聖者の天地」、吉永日洋師△同十六日、陸軍懲治隊講話、「修養の意義」矢部事正師。

△日蓮主義秋季大講演會、十月二十日顯本布教會主催、明治幼稚園講堂に開會す。爾天に謳らず聽衆滿堂。

思想問題に對する日蓮主義の權威　野澤陸軍少將

△同廿二日、多可郡青年團聯合大會、聽衆二千、「力の教」中川文學士△廿四日、第廿九聯隊將卒の爲に、「軍隊と思想問題」吉永日洋師△同廿四日、岡山縣三石町、文化講演會、「文化生活に就て」、中川日史師。「歐州戰後に於ける國民の覺悟」金子砲兵大佐△同日、三石町公會堂に於て講演會、「社會改造の本義」寺田和氣郡長。「現代の社會相」、中川文學士。△同廿五日、飾磨郡津田村主婦會總會、「予の婦人觀」中川日史師△同廿八日、地明會例會、「功利的人生觀」、吉永日洋師。「調和と共同」中川日史師、△十月三十日教育勅語發布滿三十年記念運動として、同日夕刻より姫路教堂の狂者連、手に手に提灯と小國旗を携え、市內目抜のケ所六ケ所に於て道路布教を試む。「尊き記念日」小林長次君。「教育勅語を身證せよ」、大河原鈞志君。「王佛冥會の大法」矢部事正師△同三十一日、飾磨郡廣村講演會、「國民としての自覺」、中川文學士

△岡山縣　十月十三日、英田郡林野町に於て白法會講演會「同日抄の大意」、原田日男師△同日、和氣町本成會婦人會、「四恩と兒童」原田日男師△同十六日、和氣郡可眞村平松宅、「本迹の肝要」、原田布教師△同十八日、和氣郡可眞村平松宅、「本迹の肝要」、原田布教師△同三十日、鏡田小學校に於て和氣郡明德會民力涵養講演、聽衆三百五十「免囚保護の精神」、原田布教師。「國民思想の基準」能仁事一師△同三十一日、山田小學校に於て民力涵養講演會、聽衆四百五十名、「免囚保護事業」、原田布教師。「理解の國民」能仁事一師「國民の精神」、寺田郡長

△千葉縣　九月十八日、千葉郡邉津村小學校に於て、在鄉軍人及青年會聯合大會、「生命論」武田文學士。「現代思想大觀」、野澤陸軍少將△同日夜、神崎村眞淨寺に於て、「受身の國民」武田文學士△勝浦講演、統一團幹事にして、毎月東京市本郷區に於て例會を開催しつつある高橋辰二氏は、更に夫人の出生地なる千葉縣勝浦に日蓮主義を布殖せんと發願し、昨年末より毎月同地小學校等に於て、野澤少將、妹尾義郎、三上義後、川嶋松雄氏等を聘し、講演會を開催する事既に十有五回、房總の霊地もやがて勝浦の一角より日蓮主義に目醒め初めんとせり

△北都金澤地方　△十月六日、中野少佐宅講演、「信仰と實生活」窪田純榮師△十月十二日安立寺、「法令久住」窪田純榮師△十月十六日天晴會、「宗教紀元と法華教其二」窪田純榮師。「壽量品要義」石橋會草師。「天皇日蓮御傳」小島由之助氏△十月二十七日本光寺、「報恩謝德」窪田純榮師△同日夜信徒笹川宅、「先づ信ぜよ」窪田純榮師△十月二十九日本行寺「佐渡御書の一節」窪田純榮師。「衣座室の三軌」石橋會草師。我等が一意專心に護法の聖業に捧ぐる熱誠の形と現はれ來つてか、毎會參聽の男女に新らしき顏の加はりゆくは佛意の冥助なるべし。

△萩の思想運動　長州萩に於ける日蓮主義研讀會は多數の刀圭家及將校を中堅として組織さるゝ同地唯一の思想團體なるが、頃日頻々活動の歩武を進め、同地長州新聞社と合同主催の下に思想大講演會を十月廿八日同地海座に開催し、日蓮主義の法華高〳〵多數護門の徒を驚覺せしめたり。

日蓮と帝國　長州新聞主筆　井上茂

萩護國少年團に就て　陸軍歩兵大佐　北川爲吉

思想善導と佛教　研讀會主幹　紀野俊雄

現代思潮と日蓮主義　二十一旅團長　細野少將

氣能將軍がまのあたり露國過激派討伐より祖國に歸へりて思想の潮流の險惡を憂ひ、之を救濟するは日蓮主義の外あらずと斷論し、一千五百の聽衆甚大なる法益を受けたり。會研讀會附帶事業として作年天長節より開設したる妙蓮寺內萩護國少年團は、日曜毎に百餘の兒童に日蓮主義的教養を爲し來りしが、同月三十一日第一周年紀念式を挙行せり。△發會宣言、山木晋學士。△國歌合唱、林講師。△木像禮拜、數息法。△勅語捧讀、北川大佐。△綱領朗讀及訓示、紀野主幹。△訓話、岡村郡長。△同、岩田中學校長。△同、井上長州新聞主筆。△國歌合唱、△閉式之辭、世良醫師。同日郡長町長議判所長各學校長の來賓及多數父兄の參會にて大成會なりき、因みに當日少年團維持費として左の諸氏の毎年寄附申込ありたり毎年金五拾圓也山木晋學士。毎年金貳拾圓也宮原醫師。同金拾圓也同夫人。同金五圓也北川節子。同壹圓也林貞子、同金貳拾圓也村田軍曹。同金參拾圓也林誠丸。

十月中の巡廻教化

—十月十日品川町品川座踏、畫小供會三百名、川島松雄、高木日靖夜大人會二百五十名、講師、高木日靖、國友部長。餘興浜花節、東家樂若。□—十月十一日同所、畫小供會三百五十名、川島松雄、高木日靖夜大人會三百名、高木日靖、笹川日堂。餘興講談、桃川蝶花。□—十月十八日大森町、畫小供會三百五十名、川島松雄、清口會旭、笹川日堂。夜大人會三百五十名、大原亮、高木日靖、笹川日堂。餘興浜花節東家樂若。此日午後一時より大原亮氏の遊暦觀があり、大森妙道會役員、及び巡廻教化の役員を招待せられたり。實醒にして名句續出せしが左に一二紹介する。

妙の御法の御船にのれば　毛見熊太郎

あらき波風なんのその

五十〳〵と御法の駒にむちあて〻　大原亮

わしの御山にいそぐうれしさ

六十せまで積りて見てもなにもなし

たゞ一乘の南無妙法蓮華經　同人

□—十月十九日同所、畫小供會三百五十名、毛見熊太郎、川島松雄、高木日靖、清口會旭。夜大人會四百五十名、高木日靖、大森日榮、笹川日堂。餘興浜花節、東家樂若。當夜同會講、小學生三十名許りを引率して、大森町全體に亘り、好き場所を選び、君が代を合唱して、宣傳を行うたが、非常な好果を得た。□—十月廿四日、川崎町女子高等裁縫學校に於て、百五十名、同會の辭、毛見春吉、國民の自覺、高木日靖、明治天皇の御製、笹川日堂。餘興浜花節、東家樂若、琵琶、中山榮三郎。（松雄記）

第六教區主催　千葉縣下聯合　七里法華大法要

（鋸南町　川島松雄）

今回我「うど〳〵てら」は、大網町宮谷本國寺に於ける七里法華の大法

要に招待されたので、大森の巡廻教化を終るや直ちに天幕を本國寺宛發送した。余と小林氏は廿五日午後大網に到着した、所が廿日大森縣を發送した苦の天幕が未だ來て居らぬ、果てどうした事かと色々に氣をもむで居たが、當日遂に到着せずに終つた。翌日も又一日氣をもみ通して、とう〳〵來なかつた。或鳥日衛師は「天幕困つて了つたな！」と酒落を言はれて居たが、餘程當事者の怠慢とは云へ、主催者諸君に對し同人一同に代りて手違を御詫する次第である。

本國寺　大網縣に下車して、田圃路を辿りつゝ西北に行くこと十餘町、山門を過つて更に二三町、緑門をくゞれば、山腹の鬱茂せる松の木立より、本堂の屋根がチラ〳〵見え初めた。石段を登りつむれば、廣大なる講演場は幾然として聳へ、前には七里法華大法要の大塔婆打ち立てられ、境内は所狭きまでに露店を以て埋められて居た。

掛員の目の廻るやうな忙はしい中に廿五日は暮れた。檀を圍みながら老僧の話に耳を傾けて居ると、夜は次第に更けて行く、然し話はなか〳〵盡きない、或は昔の宮谷壇林を追想して今の衰微を歎き、或は明治の初年宮谷縣が本國寺に置かれし當時の官僚横暴をいきどほり、談は次第に熱して來たが、九時を過ぎたので部屋へと引き退つた。

あまりいゝ月夜なので一人庭に出る。周圍はシンとして話聲も聞へぬ。露店の人達は疲たのだ、本堂も眠つて居る。仰げば、法性の空には雲もなく、蒼暦九月十五夜の月は、明煌々として萬象を照して居る。

廿六日　未明に鳴く百舌の高音に目醒れば、當員は勤經の支度に忙しい。六時半、警鐘と共に本堂に參集して、おごそかなる御勤めを終り、十時、數百名の善男善女堂に集れば、各教區の布教師熱辯を振ふて法味を敵ず。午後二時大法要、警鐘と共に、音樂を先頭に、稚兒の行列、當員これに續いて整々として本堂に入る。各員着席して壮厳の中に式を終れば三時半、直ちに餘興講談より、布教師の講演となる。

夜はうど〳〵てらの天幕て、講演をする豫定であつたが、何所か途中でうどんなくなつて了ふたので、青年當局より或る野戦隊を組織して大網町全體に亘つて大宣傳を行ふた。此日大網町は大祭であつたので人の往來繁るが如く、各所に非常な好成績を挙げて凱旋した。

廿七日　午前十時、當長祝下代理宗務總監鈴木日雄師の大網縣御到着を壇信徒一同は觀迎旗を繰へして出迎へた。氣遣はれて居た空模様は此時頃からポツリ〳〵と雨を降らして來たが、總監は無事到着せられ一聲に唱ふる萬歳の聲に迎へられて、雨を冒し、お婆さん達の筵旗白き歌題目を先頭に、一行は靜々と本國寺へ繰り込んだ。

午後一時、大雨沛然として降る、爲に稚兒の行列に蕊支を生じ、二時より漸く大法要に移る。大導師鈴木日雄師、數千名の當局を率ひて、いとも壮厳なる法要を營めば、講堂の善男善女、感喜の涙を流す三時半、式終つて講演に移る。

法華經の大利益　鈴木宗務總監

日蓮主義の眞髄　關田監督布教師

總監は、法華經の大利益を、簡單明瞭に說いて餘さず、關田師は、監督布教師としての第一聲を、此大法要に於て發ぐるは、余の光榮とする所であると前提して、最も熱烈に講演され、拍手喝采堂を搖がさん許りであつた。此日私の最も感じたるは多くの信徒が、雨の土砂降りをも厭はず、草鞋ばきで、數里を遠しとせずして參拜し、中には年寄りを背に負ふて來るのも多く見受けた事であつた。夜は縣下青年布教師の熱烈なる講演があり、入り代り立ち代り、十時まで續けたが、講堂の聽衆は、最後まで謹聽した。

廿八日　早朝の御勤めの後で、一騎當千の士と共に、壇を圍みながら、今後の布教方法等を談じ合ひし事は實に愉快であつた。七里法華聖地の大覺醒も、間近い事であらう、今や當局は、現秋にあきたらずして、布教方法を講ずるあり、又信徒の目醒めたるあり、殊に十一月廿五日より三日間、東金西福寺に於て、當長祝下の開目鈔講義と、特派講師の社會政策、宗義精要、其他の講演がある由、これで縣下の風紀も一新するであらう。

參列の當局もぼつ〳〵歸るので、余も別れを告げて出た。昨日の雨はいつしか晴れて、秋空高く、木末に鳴く百舌の音に送られつゝ、我度か本堂を見返り、惜しき袂を分ちぬ。終りに臨み、掛員一同の御厚意を深謝致します。

自慶會支部月報

△十月十五日、名古屋市豊田織布押切工場、女工二百人「心の珠を磨け」、國友文學士。「人」山内講師△同日、淺野木工、聽衆三百人、「物質より精神へ」、國友講師。「家族制度の國柄」山内講師△同十六日、豊田紡織本社、社員及男工五百人、「思想問題の歸趨」本多貌下。「平和の生活」、野澤少將△同日、豊田織布菊井工場、女工二百人、「修養の第一歩」本多貌下「心こそ大切なれ」、國友講師△同十八日、名古屋郵道局、聽衆三百人、「思想問題と日蓮主義」、本多貌下△同十九日、菊井紡織、女工六百人、「人の心」、國友文學士。「佛天恵覽」山内講師△同二十日、專賣支局、第一回女工千八百人、「樂しき人生」本多講師。「神佛を頂いて、山内講師。同第二回、男工三百人、「大切な心得」、本多貌下△同日、日本車輌、木工三百人、「人格教育」、本多大僧正△同日、山岸製材、職工三百五十人、「心の光」、國友講師「日本勞働者の心得」、山内講師。△同二十一日、明石市例會講演會、聽衆五百、人「思想問題解決の鍵」野澤少將△同二十三日、神戸市三菱造船所、第一回職工五千名、「人格教育」、本多講師。第二回職工五千名、「樂しき人生」本多講師△同二十五日、神戸製鋼所、住長以上の社員、「思想選擇の評準律」本多講師△同二十六日、大阪市安治川鐵工所、「樂しき人生」、本多貌下△同二十七日、豊田織機、職工六百、「人格教育」、本多講師。

自慶會明石支部創立　今春四月以來本多貌下の御來明を煩して精神講話を開きつゝありし明石市内の有力者は、十月十九日を以て自慶會明石支部を創立し、既に百餘名の會員を得て一大活動を起さんとし、幹事として中川軍醫少將、加藤判事、三輪市長、川崎英照、井田師範校長、前田教育會長、三浦醫師會長、深野市助役、岸本直太郎氏等を撰定したる由。

続一間月報

○日曜講演　九月十六日、日蓮主義提唱、大森日榮。現代と宗教、木村日保。三大秘法鈔講義、本多日生。九月十九日、佛教慈世觀、秋山乾英。現代の要求、妹尾義郎。忘持經に就、森川日修。二十六日信仰と悲哀、小林智道。三大秘法鈔講義、本多日生。十月三日、日蓮聖人御入滅の遺誡、高木日靖。新時代の宗教、關田日城。本門戒體鈔講義、本多日生。十日、佛教慈世觀。秋山乾英。十章鈔講義、本多日生。十七日、光明の人生、妹尾義郎。知法思國、木村日保。二十四日、日蓮主義の力、安藤乾齋。功德の光、妹尾義郎。迷信と正信井村日祐。三十一日、日蓮主義所感、川島秋雄。本尊と慈世觀、高木日靖。教育勅語と思想問題、本多日生。

當閣增築工事中は妙經寺本堂を以て臨時會場とせしが、十月三十一日の講演より再び當閣講堂に於て開講す。恰も此の日、天長の佳節、昨は教育勅語發布三十年記念日にして、聖は明治神宮鎭座祭なり。恩師貌下には教育勅語と思想問題と題して午後三時半より七時に至る長時、長廣舌を振ひ給ふ。一人の中座するなく、唯感歎の吐息のかすかに響くあるを聞く。論旨は何れ他日誌上に發表せらるんか。

各所講演、地明會、子供會等、所期の榮榮々迫髮す。

廣告

大僧正本田日生猊下御講演

日經上人の功勳

右統一臨時號として大正九年十二月十五日發行す。新年贈答用に絶好の良册子なり。希望者は大正九年十二月拾日迄に、東京府品川町妙國寺内大森日榮宛申込まれたし。

定價　一部　金拾錢　郵稅金五厘
五十部以上一割引　一百部以上二割引

統一定價改正

大正十年一月號より本誌定價を改正し、益々内容の充實を計り、以て時代の要求に對應せんとす。乞ふ、倍舊の愛讀あらんことを。

（體裁其他に對しては事情により右數費援助の意味にて十二分の割引あり）

改正定價　一部　金參拾錢　郵稅金一錢
一ヶ年　金參圓參拾錢　郵稅共

本多日生猊下著書一覽

○法華經の心髓　金壹圓六拾錢
○日蓮主義初步　金七拾錢
○日蓮主義　金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢
○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義の運用　金壹圓八拾錢
○東洋文明の權威　金壹圓八拾錢
○國民教化　金貳圓貳拾錢
○法幢　金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經　金貳圓
○聖訓要義　卷一、二、三、四、五、壹部金壹圓七拾錢　卷六、壹部金參圓
○開目抄詳解　上卷一部金貳圓　金貳圓貳拾錢
○聖語錄　金八拾五錢
○優婆塞戒經通解　以上各送料一部金八錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢　上卷下卷各一部金參圓四拾錢　一部金參圓四拾錢　送料一部金十八錢
○法華經講義　上卷一部金貳拾四錢　送料一部金十一錢　既刊　年前金送料不要
○大藏經要義　金參拾錢　上製金五拾錢　送料一部金貳錢
○法華經要文

○思想の惡化善化
○人類文明の基礎
○正しき理解と信念　各一部金六錢百部以上金五錢の割　送料一部金貳錢

以上購讀希望の方は左記へ申込まるべし

東京市外品川町妙國寺内
大藏經要義刊行會
振替東京三一一五九六番

定價	廣告料
一冊　金貳拾錢　送料一錢	一頁　金拾圓
一ヶ年　金貳圓貳拾錢　送料共	半頁　金六圓
	四分ノ一頁　金參圓半
	前金の事

大正九年十一月三十日印刷納本（第三百九號）
大正九年十二月一日發行

不許複製

發行所　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地　國友日斌
編輯兼發行人　東京市神田區美土代町二丁目一番地　鈴木日雄
印刷人　東京府荏原郡品川町南品川四百十番地　二宮秀舍
印刷所　名古屋市中區新榮町四丁目十五番地　統一發行所
發行所　振替東京五一〇七一番　常德寺内　統一編輯所
編輯所

統一第三百九號

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正九年十二月一日發行（毎月一回一日發行）